

千葉県中近世城跡研究調査報告書

第 12 集

— 峰上城跡測量調査報告 —

平成 3 年度

千葉県中近世城跡研究調査報告書

第 12 集

みねがみじょう
— 峰上城跡測量調査報告 —

平成 3 年度

序

千葉県には、817か所の中近世城館跡が存在することが知られています。これらの城館跡は、中近世の豪族、領主が居住していたことから、この時代の政治史、民衆史を知る上で欠くことのできない遺跡です。

首都圏に位置する本県では、近年のめざましい経済の進展に伴い、ゴルフ場建設やリゾート開発など各種の大規模開発や、それらに関連したミニ開発が各地で進められています。そのため、地理的景観や歴史的風土に急激かつ大きな変貌が見られ、城館跡、貝塚、古墳などの埋蔵文化財の保護にも大きな影響を及ぼしています。

このため、千葉県教育委員会では、昭和55年度から国庫補助を得て、重要遺跡確認調査の一環として県内に所在する城館跡のうち、本県の歴史を知る上で貴重なもので、開発等により破壊される恐れのあるものについて、その範囲、施設、構造及び構築年代等を明らかにし、保存を含めた開発との調整を図るための基礎資料を得ることを目的に、測量調査を実施することとなりました。

今年度は、富津市に所在する峰上城跡の調査を財団法人千葉県文化財センターへ委託し実施しました。その結果、従来、峰上城の施設は山頂部にのみ設けられていたとされていましたが、斜面、山麓にも設けられているとともに、その遺存状況は非常に良好であることが明らかとなりました。

このたび、この調査成果を報告書として刊行する運びとなりましたが、本書が学術資料としてはもとより、文化財保護、活用の一助として、広く一般県民の方々にも活用されることを願ってやみません。

終りに、文化庁をはじめ、地元富津市教育委員会、土地所有者の皆様方など多くの方々から感謝申し上げます。

平成4年3月

千葉県教育庁生涯学習部

文化課長 白石竹雄

例 言

1. 本書は千葉県富津市上後字要害に所在する峰上城跡（遺跡コード226-004）の測量調査報告書である。
2. 本事業は、千葉県教育委員会が国庫補助を受けて、調査を財団法人千葉県文化財センターに委託して実施したものである。
3. 調査および整理作業・報告書作成作業は、研究部長天野 努、同部長補佐渡辺智信の指導のもとに技師高梨俊夫が担当した。
4. 地形測量は京葉測量株式会社に委託し、平成3年11月～12月に実施した。本書に使用した方位はすべて公共座標によるものである。
5. 本書では国土地理院発行の1/50,000および1/25,000地形図を利用した。
6. 峰上城絵図は国学院大学図書館に所蔵されており、同館の許可を得て撮影・掲載したものである。
7. 摩利支天社鱧口・鏡は石井 博氏の所有するものであり、同氏の許可を得て撮影・掲載したものである。
8. 第3章の概念図の縮尺は1/2,500、位置図は1/10,000、鳥瞰図の縮尺は任意である。
9. 本書で記載している「峰上」「峯上」「嶺上」の地名は同一地域を指すものであり、文書に登場する場合を除いて「峰上」を使用している。
10. 現地調査から本書の執筆に至るまで、下記の諸氏、機関から御指導、御協力をいただいた（敬省略）。深く謝意を表します。

石井 博、国学院大学図書館、館山市立博物館

目 次

第1章 位置と環境	1
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	3
第2章 調査の概要	5
第3章 城の構造	7
1. 概要	7
2. 中心部遺構群	8
3. 北部遺構群	10
4. 西部遺構群	14
5. 南部・東部遺構群	18
第4章 周辺の中世的景観	20
1. 峰上地域の中世的景観	20
2. 周辺の城館跡	24
第5章 まとめ	27
1. 測量調査からみた峰上城跡	27
2. 文献史料からみた峰上城	28
3. 結語	32

挿 図 目 次

第1図 上総南西部城館跡分布図	2
第2図 峰上城跡周辺地形図	6
第3図 北部遺構群概念図・鳥瞰図（東側）	10
第4図 北部遺構群位置図	11
第5図 北部遺構群概念図・鳥瞰図（西側）	12
第6図 北部遺構群位置図	13
第7図 西部遺構群概念図・鳥瞰図（北側）	14
第8図 西部遺構群位置図	15
第9図 西部遺構群概念図・鳥瞰図（南側）	16
第10図 西部遺構群位置図	17

第11図	堀切-12周辺遺構模式図	17
第12図	南部遺構群概念図・鳥瞰図（東側）	18
第13図	南部遺構群位置図	19
第14図	峰上城跡周辺中世遺跡分布図	20
第15図	恩田・常代やぐら、五輪塔・宝篋印塔実測図	22

付図1 峰上城跡概念図

付図2 峰上城跡地形測量図

図版目次

原色図版1 1. 峯上古城之図、2. 上後古城之図

原色図版2 1. 摩利支天社・鰐口、2. 同上・鏡（裏）、3. 同上・鏡（表）

図版1 峰上城跡周辺空中写真

図版2 1. 峰上城跡遠景（北から）、2. 同上（東から）

図版3 1. 郭-14（尾崎曲輪）（北東から）、2. 同上

図版4 1. 堀切-1（大堀切）（西から）、2. 北部西側・腰曲輪群（南東から）

図版5 1. 堀切-12（南から）、2. 西部南側・横穴状遺構（南東から）

図版6 1. 堀切-18・堀底土橋状遺構（西から）、2. 同上（北から）

図版7 1. 堀切-25・虎口（東から）、2. 同上（西から）

図版8 1. 堀切-25・虎口（南から）、2. 同上（北から）

図版9 1. 郭-20壁面・石積階段遺構、2. 同上

図版10 1. 小志駒やぐら（1号）、2. 小志駒やぐら（2号）

図版11 1. 恩田やぐら全景、2. 恩田やぐら内五輪塔（1～5号）

図版12 1. 常代やぐら全景、2. 同上・やぐら内五輪塔（1号）、3. 同上・やぐら内五輪塔（2号）

図版13 1. 東大和田城山砦跡遠景（西から）、2. 常城砦跡遠景（東から）

図版14 1. 天羽城跡遠景（北西から）、2. 天神山城跡遠景（北西から）

第1章 位置と環境

1. 地理的環境

峰上城跡は富津市^{うすへ}上後字要害^{たきまき}及び環を中心とした地域に所在する。峰上城の所在する富津市は房総半島の南西部に位置し、君津市、鴨川市、鋸南町と接し、旧安房国との国境にもほど近い、旧上総国の南西端にあたる。本城は、東京湾に突き出た富津岬から約10km南下した所にある上総湊から湊川を約5km東へ溯った南岸、支流である志駒川の東岸に南から北に延びる丘陵上（標高100～130m）に築かれている。

本城跡の周辺は湊川流域の平野部水田地帯が広がり、北には鹿野山丘陵、南には鋸山一清澄山丘陵という房総丘陵の山々が迫る。房総丘陵は複雑な地形を示し、山が急峻で谷部との比高差が激しく、本城跡周辺では60m以上を測る。幸いなことに開発の手も未だ加わず、城郭遺構はほぼ完璧な状態で保存されており、中世末の戦国の状況を生々しく現在に伝えている。

峰上城の占地の要因を考えれば、この地域は古来交通の要衝であり、近隣には関所の所在の伝承される関の地名が見られ、また関所^関に所在する道標（推定江戸時代）には房州道（右側面）・天神山道（表）・鹿野山道（左側面）と記され（註1）、房州道は峰上城の脇を通過して安房国へ向かい、天神山道は上総湊方面、鹿野山道は清和、小糸、久留里方面に向かう道であり、現在でも県道として主要幹線になっている。ここを起点とすると、直線距離で周辺の主要城郭である金谷まで11km、佐貫まで8km、久留里まで16km、真里谷まで22km程である。中世においてはこうした陸上交通路の他に湊川を利用した水運も考えられ、『快元僧都記』天文5年（1536）5月10日条に鶴岡八幡宮の建築用材として上総峰上の木材を伐採して輸送した記載も見られる（註2）。湊川の河口である上総湊は浦賀水道を隔て三浦半島と対峙する位置にあり、東京湾海運の基地として江戸時代には江戸通船で生魚、薪、等を輸送している。

註

註1 『富津市史』資料集1 富津市史編纂委員会 1979

註2 『神道大系』神社編20 鶴岡 神道大系刊行 1975

参考文献

『海上・河川交通』 千葉県歴史の道調査報告書18 千葉県教育庁生涯学習部文化課 1991

2. 歴史的環境

峰上城跡の位置する富津市南部は『和名抄』中の上総国天羽郡に比定される地域である。郡家の所在地は未だ確定されていないが、湊川下流域には古墳や横穴群が分布し、首長層を支える経済的生産基盤は前代には確立されていたことが伺える。また、『和名抄』には天羽の駅名も見られ、古代からこの地が交通の要衝であったことも併せて伺える。

古代末になると、湊川流域は興福寺領である「天羽荘」が発生し、荘官としてこの地を直接支配したのが天羽氏である。天羽氏は千葉氏の一族であり、七代千葉常重の弟、常家が上総介を名乗って上総氏を称し、その子、常明を経て直胤が「天羽荘」を支配することになったことに始まる。一説によるとこの天羽氏の荘官館が天羽城だという。

古代から中世前半のこの地域に関する史料はめぼしいものが無く、詳細は不明と言ってよい。そして中世後半に至り、上杉禅秀の乱、永享の乱、享徳の乱が勃発した15世紀前半から中葉にかけて、「鎌倉府体制」の崩壊に伴い、戦国の様相が激化してくる。この享徳の乱中の康正2年(1456)に上総に侵入してきたのが武田信長である(註1)。しかし、これには確実な史料はない。

武田信長の入国に始まるとされる上総武田氏は、その歴史や系譜において不明な部分が多いことが既に指摘されている(註2)。当時、上総国は犬懸上杉政憲の支配地であったらしく(註3)、敵視する古河公方足利成氏の命を受けて信長が侵入してきたものと考えられている。真里谷城・長南城を本城として上総地域に勢力を伸ばし、支城及び枝城を配し、支配の拠点とすると共に外敵の侵入に備えている。この内、城の存続年代が確定できるものは皆無であるため、それぞれの城は情勢に応じて暫時築城されていったものと思われる。その中において、上総西南部の拠点として築城されたのが峰上城である。安房の里見氏の北上に備えるために、山間部の街道の要衝を峰上城をはじめ、天羽城、天神山城、君ヶ谷城を配しておさえ、海岸沿いには金谷城、造海城を配している。

峰上城は築城年代こそ明らかではないが、天文年間の記録にその名を確認することができる。天文6年(1537)には真里谷武田氏の内紛における反乱の拠点となり、小弓公方足利義明に攻められている(註4)。それ以来里見氏に圧迫されるようになり、天文7年(1538)の第1次国府台合戦で小田原北条氏に足利義明・里見義堯側が敗れたが、足利義明の滅亡によって、里見氏の勢力は西上総地域へより拡大していった。よって峰上城も里見氏の支配下におかれたものと思われ、この頃里見義堯は久留里城におり、嫡子義弘を佐貫城に在城させていたという(註5)。天文23年(1554)、峰上城の尾崎曲輪根小屋22人衆の頭目、吉原玄蕃助に差し出された北条氏の朱印状がある(註6)。これによると、里見氏の領国内でありながら小田原北条氏と通じ、ゲリラ・スパイ活動をした土豪の存在を示している。しかし、このような者たちがいた峰上城

は城としてどのように機能していたのだろうか。天文年間以後、峰上城の記載は現在のところ文書、記録類に見当たらない。

その後里見氏は永祿7年(1564)、第2次国府台合戦に敗北したものの、永祿10年(1567)の三船山の合戦の勝利により、上総のみならず下総へも進出した。しかし、武田信玄没後の小田原北条氏の本格的な侵攻により勢力を縮小され、天正18年(1590)小田原北条氏滅亡による豊臣秀吉の政策により、里見氏領国は安房一国のみとなり、上総地方は徳川家康の領国となった。江戸幕府開幕後は上総の城は近世城郭として佐貫・大多喜城が残り、また飯野陣屋をはじめ、陣屋が多く築かれた。

註

- 註1 「上総国へは武田入道打ち入りて庁南の城、まりが谷の城両所を取立て、父子是に楯籠りて国中を押領す。」(「鎌倉大草紙」『群書類従』第25輯)
- 註2 川名 登 「上総武田氏について—その発給文書を中心として」『千葉経済論叢』創刊号 1989
小高春雄 『長生の城』 1991
- 註3 「応仁武鑑」『大武鑑』巻1
- 註4 「快元僧都記」『神道体系』神社篇20 鶴岡 神道体系刊行会 1975
- 註5 大野太平 『房総里見氏の研究』 寶文堂書店 1933
- 註6 「鳥海文書」『神奈川県史』資料編3 古代・中世 1979

引用・参考文献

- 『千葉城郭研究』第1号 千葉城郭研究会 1989
- 『真里谷城跡』 木更津市教育委員会 1984
- 『金谷城跡』 君津郡市文化財センター 1988

第2章 調査の概要

この度の調査の目的は測量調査により峰上城跡の構造・規模・性格等を把握すると共に、文献、地名、古道、寺社等の調査を行い、城の歴史的背景や変遷を明らかにすることである。

測量調査については業者委託により、空中写真測量及び現地での補備測量によって1,000分の1の地形測量図を作成した。城郭関連遺構をいかに正確に測量図に反映させるかを考えた場合、あらかじめ実見して城郭の構造を把握しておかなければならないため概念図が必要不可欠となる。従ってこの間現地踏査を続け、概念図の作成、特徴的な遺構の写真撮影等を行い城郭関連遺構の把握に努めた(註1)。その結果、当初予想していたよりも広範囲に遺構が分布していることが明らかとなり、特に尾根という尾根を切断する堀切や山麓まで執拗に続く腰曲輪など本城を特徴付ける遺構を多数確認することができた。

つぎに文献史料だが、峰上城が直接記載されているものは『快元僧都記』(註2)、『烏海文書』(註3)、『妙本寺文書』(註4)、等であり、あまり頻繁に登場する訳ではない。その他は峰上城内にある摩利支天社の鰐口銘や『里見代々記』といった軍記物に一部見られるのみである。従ってこれらの限られた史料をもとに他の関連史料を使って、真里谷武田氏、里見氏を中心とした峰上城の歴史を概観することとする。

さらに周辺の小字名、土地の通称、屋号、寺社、集落、古街道、城館跡等から当地域の中世的景観を復元する試みもしてみたい。

なお峰上城に関する先学の書として昭和45年発行と思われる天羽町文化財審議委員会、委員長小宮保四郎氏による『峯上城址踏査による中世紀史料の一斑』がある。

註

註1 概念図の作成にあたっては次の文献に掲載されている峰上城概念図を参考にした。

池田 誠作図 『真里谷城跡』 木更津市教育委員会 1984

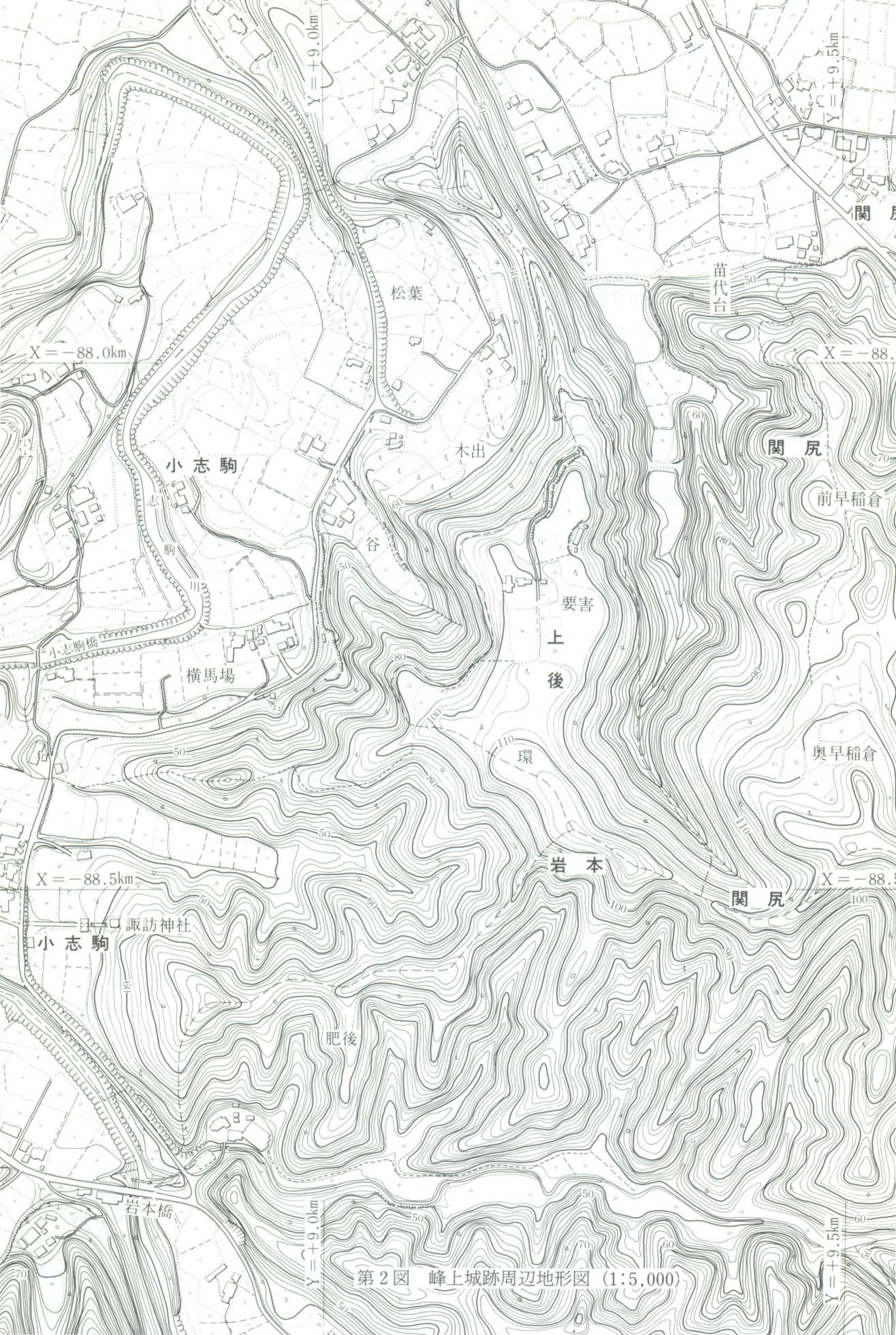
市村高男作図 「中世城郭史研究の一視点」『中世東国史の研究』 中世東国史研究会 1988

註2 『神道体系』神社編20 鶴岡 神道体系刊行会 1975

註3 『千葉縣史料』中世篇 諸家文書、1962

『神奈川縣史』資料編3 古代・中世 1979

註4 註3に同じ



第2図 峰上城跡周辺地形図 (1:5,000)

第3章 城の構造

1. 概要 (第2図、付図1・2、原色図版1、図版1～9)

城は地域支配の拠点であると共に、その構造の意味するものは外敵の侵入をいかに防ぐかである。そのためには地形的な占地の問題から始まり、どこにどのような施設を配備するかという軍事的な理論に基づいて構築されているはずである。その構築理論も時代や氏族により異なるものであり、峰上城も年を経る間に、または勢力関係の移譲があった時に改築されている可能性も考えられる。今回の調査では測量という表面観察による方法であるため、城の廃絶時の姿ないし後世に改変された姿を捕えるに止まるのみである。よって、このようなことを念頭に置きながら、数百年間保存されてきた峰上城の遺構を見て行くことにする。

丘陵に構築された本城はもともとの自然地形を巧みに利用し、概ね以下のような施設を配置している。山頂部を平坦に削平して土塁や段差によって区画された比較的広い面積を有す郭、郭の周囲を一段下がって巡る細長い平坦面である帯曲輪、斜面部に段々畑状に造られた腰曲輪、尾根筋を断ち切る堀切、斜面の傾斜方向に掘削された豎堀、その他虎口や櫓台と推定される施設。また現況では確認できないが、絵図に記録されている空堀。そして断崖絶壁にそぎ落とされた崖。これらの施設が有機的に複合されて峰上城が形成されている。

城域の確定は非常に難しいが、堀切や腰曲輪を含めた規模は南北約600m、東西約500mである。標高は摩利支天社の所在する約130mの地点を頂点に115～100mの主要郭から35m前後の水田面まで急峻な斜面が続く。

遺構の呼称については郭はアラビア数字を使って、郭-1、郭-2のように表し、郭の連続する山頂部(郭-1～15)を中心部遺構群として捕えることとし、その他の遺構については適宜呼称を与えることにする。また、中心部以外の遺構は説明のために便宜的に北部・東部・南部・西部各遺構群として扱うものとする。

地名の通称、小字名については絵図に記載されているものを参考としたが、城内に居住する石井博氏からの聞き取りによるところが大であった。

全体での遺構の内訳は、郭(20)、帯曲輪・腰曲輪(多数)、土塁(7)、堀切(25)、豎堀(17)、虎口(3)、櫓台(9)、井戸(6)、溜池(1)である。

地元の通称では郭-1を「本城」、郭-2を「中城」と呼び、この地区は小字「環」となっている。郭-3～8は小字「要害」といい、郭-3・4は「後城」と通称されている。郭-8は絵図には「大門」と書かれ、城の大手にあたると思われる。また郭-8の北には大堀切があり、「大橋」と書かれている。よって地形も加味すると、北を大手、南を搦手とする城郭構成を取

っていたものと考えられる。現状では郭-5・8が宅地、郭-4、郭-3・6の一部が畑になっている他は、竹藪及び山林である。

2. 中心部遺構群

北は郭-8の北側の堀切、南は郭-1の南側の堀切、西は郭-10、郭-14、15の西側の堀切で画されており、山頂部の太い尾根筋を削平して平坦部を形成している。

郭-1 (本城)

城域の南に位置し、標高も約114m前後と郭の中では最も高い場所にある。「大門」から約200m離れており、近世城郭では本丸に相当する峰上城の中核部である。自然地形をそのまま利用した雑形(南北35m、東西45mの不正方形に8m×33mの突出部が東側に付随)であり、周囲には土塁(高さ0.3~1.1m)が巡る、面積約1,840㎡の郭である。背後には守護神である摩利支天社があり城の最高所(標高約130m)となっている。その先には堀切(上幅16m前後、深さ12m前後)があり、さらに南東に延びる尾根には6本の堀切が連続している。これを「七堀切」と称し、地元では峰上城のもっとも有名な遺構として認識されている。郭-2とは約6mの段差で区画され、郭-2からの入口は土塁が途切れ、虎口と思われるが、西側が崖崩れを起こしているのであまり明確ではない。ここから摩利支天社へは西側の縁辺部を巡る土塁の上を歩いて行くが、この途中に土塁を郭の中から外に貫通する穴が穿たれているのを2か所で確認した。城に伴う遺構かどうか疑問が持たれるが、排水溝の役割を果たすものと思われる。東・西両側は断崖絶壁(比高差約12m)になっており、登攀はまず不可能であろう。

郭-2 (中城)

郭-1(本城)の北に一段下がって(比高差約6m)位置し、面積は約4,430㎡で城内で最も広い郭である。絵図によると北側は郭-3・4と空堀で区画されているが、現況では埋没してしまっており確認できない。東西両側は腰曲輪が形成されており、特に西側はある程度の規模をもった平坦部(郭-11~15)が段をなしている。郭-4からの入口部である北西隅には方形の高まりがあり、櫓台と思われる。

郭-3・4 (後城)

郭-2(中城)の北に一段下がって(比高差約3m)並んで位置し、郭-4の方が郭-3よりも約1m低い。郭-3は面積約3,820㎡で、北側に土塁状の突出部(幅5m、高さ2.5m、長さ14m)をもつ。郭-4は面積約1,250㎡のほぼ長方形の郭である。西側に土塁を伴い、断崖絶壁の斜面には「殿井戸」と呼ばれる井戸が存在する。

郭-5

郭-4の北に一段さがって(比高差約1m)位置し、郭-6・8とは現在道で区画されている。しかし、本来は郭-6・8間の土塁が西に延び、郭-6を含めた約半町(50m)四方の方

形の郭だった可能性も考えられる。面積約2,720㎡であり、現在南側が石井氏の宅地となっている。

郭-6

郭-5の東に郭-3から一段下がって位置する郭であり、北は郭-8と土塁（幅3m、高さ1m、長さ23m）で区画されている。郭-7とは段差及び郭-3から延びる土塁状の高まりによって区画される。面積約1,000㎡。

郭-7

郭-6の東に郭-3から一段下がって位置する方形の郭である。面積約650㎡。

郭-8

郭-6の北側の土塁を隔てて位置し、絵図によると「大門」と呼ばれる、城の大手に当たる場所である。雑形であり、面積約2,400㎡。北には2段の腰曲輪と大堀切（上幅約16m）が存在し、東及び北西は比高差10m以上の断崖になっており、その下から山麓部までの斜面には腰曲輪群が形成されている。

郭-9

郭-5の西側に一段下がって（比高差3m）位置する、幅約18m、長さ約95mの帯曲輪状の郭である。絵図には「鍛冶屋敷」と記され、鍛冶関連の施設が所在した場所であろうか。

郭-10

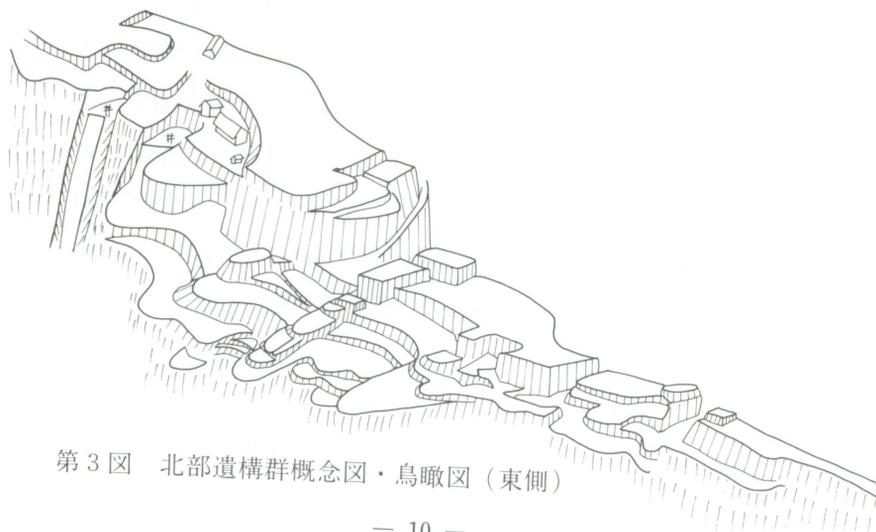
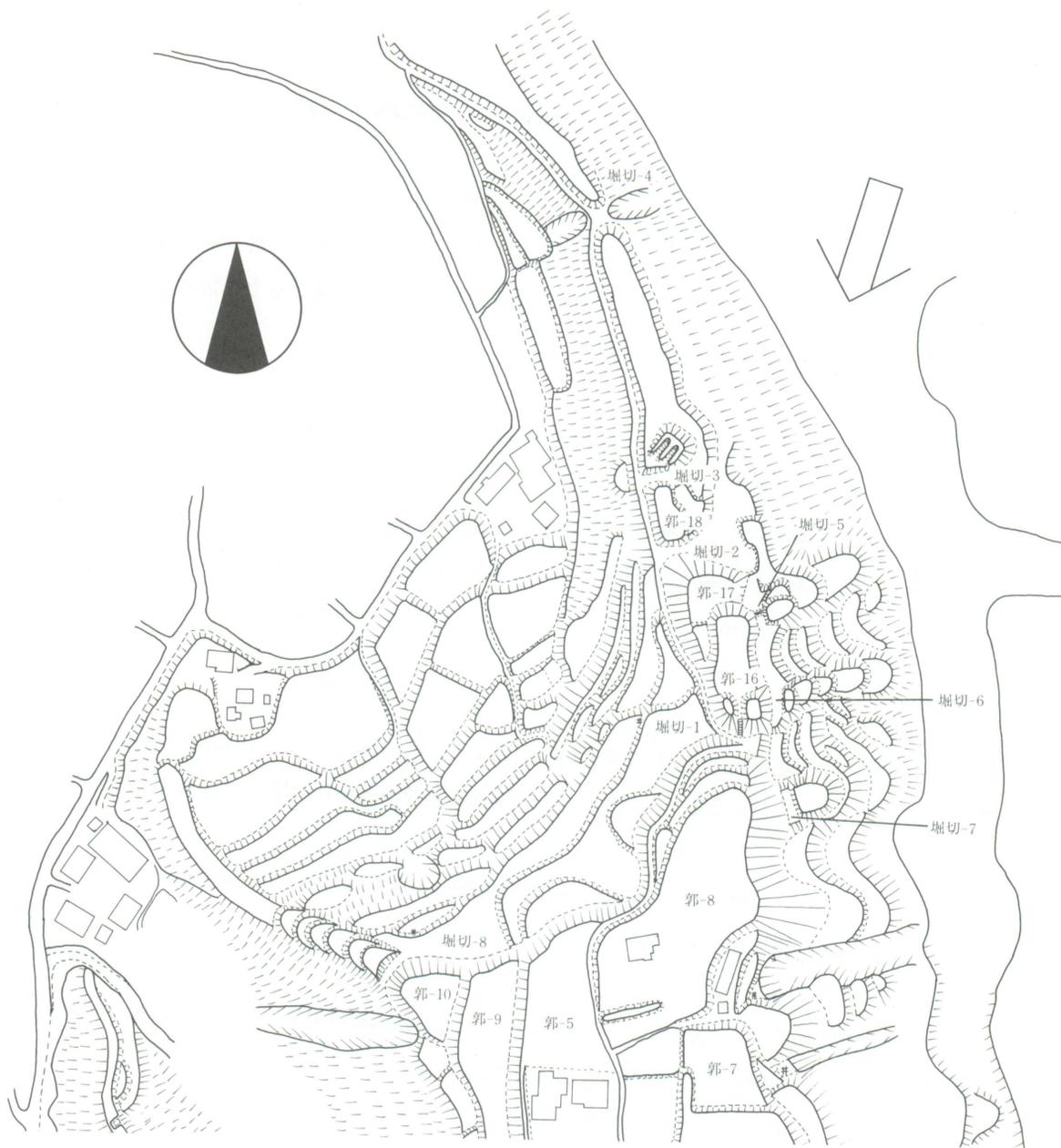
郭-9の西にさらに一段下がって位置する面積約300㎡の腰曲輪である。北西に延びる尾根は堀切（上幅約10m、深さ10m・2m）で切断されている。

郭-11～15

郭-2の西側に位置する比較的広い平坦部を持つ一種の腰曲輪群である。絵図には郭-15が「尾崎」と記載され、現在水田となっている郭-14を石井博氏は「尾崎の田」と呼称している。よって郭-14ないし郭-15を文献（註1）に登場する「峯上尾崎曲輪」に比定してよからう。郭-11は郭-2の西側の縁を一段下がって巡る幅10m前後の帯曲輪であり南側では北西に向かって約45m突出する。面積約1,100㎡で井戸が1基所在する。郭-12・13は郭-11の突出部の北側に段差によって造成された腰曲輪で、面積はそれぞれ330㎡・300㎡である。郭-13の北には溜池が所在し、「馬洗池」と呼ばれている。郭-14、北西と南西に延びる尾根の分岐点にあたり、南西側は堀切で断ち切られ、北西側には一段下に郭-15が所在する。面積約700㎡。郭-15は不整形で面積約480㎡。郭-15の下には一段小規模な平坦部があり、その先は堀切によって尾根を断ち切っている。なお、北西に延びる尾根の両側は断崖絶壁にそぎ落とされている。

註

註1 「鳥海文書」『神奈川県史』資料編3 古代・中世 1979 6961・6962号文書



第3図 北部遺構群概念図・鳥瞰図（東側）

3. 北部遺構群

郭-8から北に延びる尾根筋には大堀切を含め4つの堀切と郭-16~18が存在する。

堀切-1(大堀切)は上幅約16m、深さ約10mの大規模なものであり、絵図に「大橋」と書かれた大手前の重要な防御施設である。堀切-2は上幅約10m、深さ約7mで壁が垂直に切られ箱堀状を呈す。堀切-3は上幅約5m、深さ約3mの小規模なもので、断面はU字形。堀切-4は城域の北端を画すると思われるものであり、丘陵尾根の幅が狭まった所に位置する。上幅約4mで現在殆ど埋没していて若干のくぼみが確認できる程度である。東西両側には堅堀が入れられており、尾根筋をさらに狭めている。



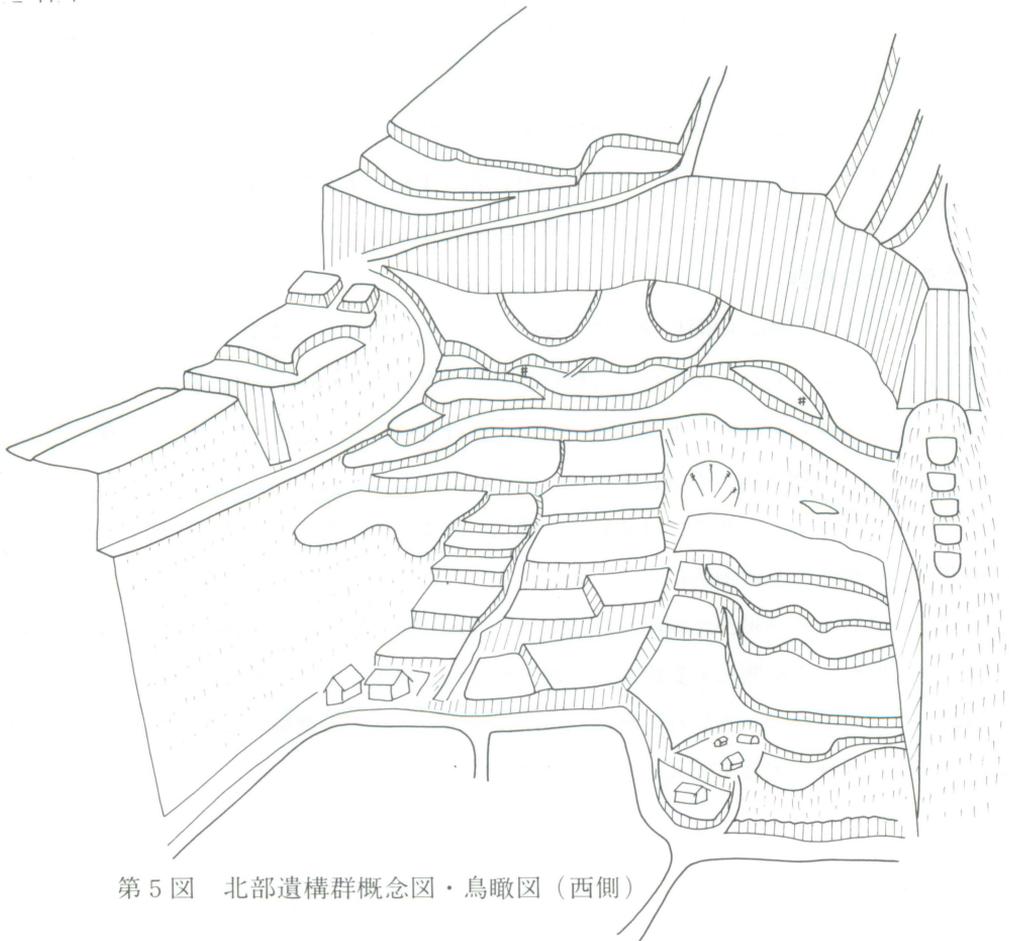
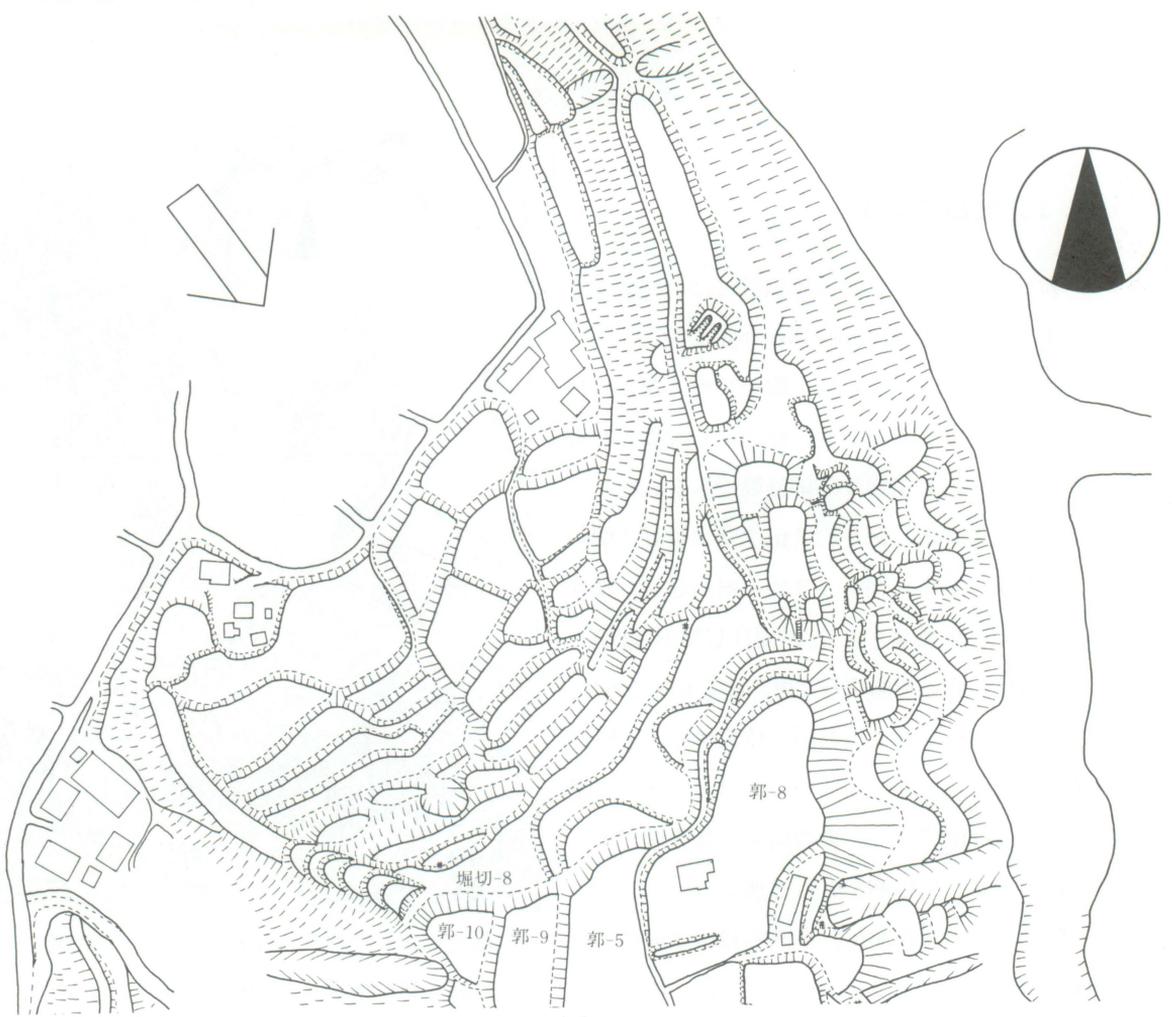
第4図 北部遺構群位置図

郭-16は南北約30m、東西約12mで現在、石井家の墓地となっており、江戸時代頃の宝篋印塔が所在する。一段下がって郭-17、堀切-2を隔てて郭-18が所在し、堀切-3に至る。いずれも200m²足らずの小規模な郭である。堀切-3の北には畝状の遺構が存在するが、機能等が不明であり、類例を検討してみたい。

東西両側の斜面は北部では双方とも急峻であるが、南下するに従って西側が割りと緩やかになって行く。東側は谷が南に向かって入り込み、郭-1の下まで沢となって続いている。現在道は尾根筋の西側を通っているが、近世以降に造られたものと思われる。

(1) 東側斜面遺構群

北に延びる尾根の東側の斜面に存在する遺構についてふれることにする。ここは城の本来の大手道であったと考えられ、東に延びる枝状の尾根に堀切-5・6を入れ、堀切-1(大堀切)下までの通路を造成している。堀切-3の一段下には堀切-2の堀底から広がる一種の曲輪があり、南進すると東側に鉤の手状に張り出した遺構のポケットに入り、段差を上って行くと堀切-5の堀底に到達する。ここには北側に土橋状の高まりが存在する。さらに郭-16下の腰曲輪を南進すると堀切-6の堀底に入り、堀切-1(大堀切)に到達する。堀切-5・6の所在する尾根筋は階段状に平坦部が成形され、郭-16下の斜面には6段の腰曲輪が成形されている。堀切-1(大堀切)の東側にも数段の腰曲輪が見られ、斜面を上って来る敵に備えている。また、堀切-7の東に櫓台と思われる高まりが所在する。これらの遺構群は大手筋を固めると共に東側の斜面から城の大手に侵入して来る敵に対しての防御施設である。



第5図 北部遺構群概念図・鳥瞰図（西側）

(2) 西側斜面遺構群

郭-8から北へ延びる尾根と郭-10から北西へ向かって延びる細尾根の間の斜面に形成された腰曲輪群を主体とする遺構が所在する。

郭-10から北西へ延びる細尾根は堀切-8(上幅約12m、深さ約13m・2m)によって断ち切られ、その先は6段の小規模な平坦部が階段状に続く。尾根の両側は垂直にそぎ落とされている。

郭-8・5・9・10の北側は壁を垂直に削り落とし、最初の段の腰曲輪を形成している。郭-8との比高差は約18m、郭-9との比高差は約14mもあり、直接登攀するのは不可能であろう。これより山麓部まで段々畑状の腰曲輪が連続するが、段差によって区画されたものを総て数え

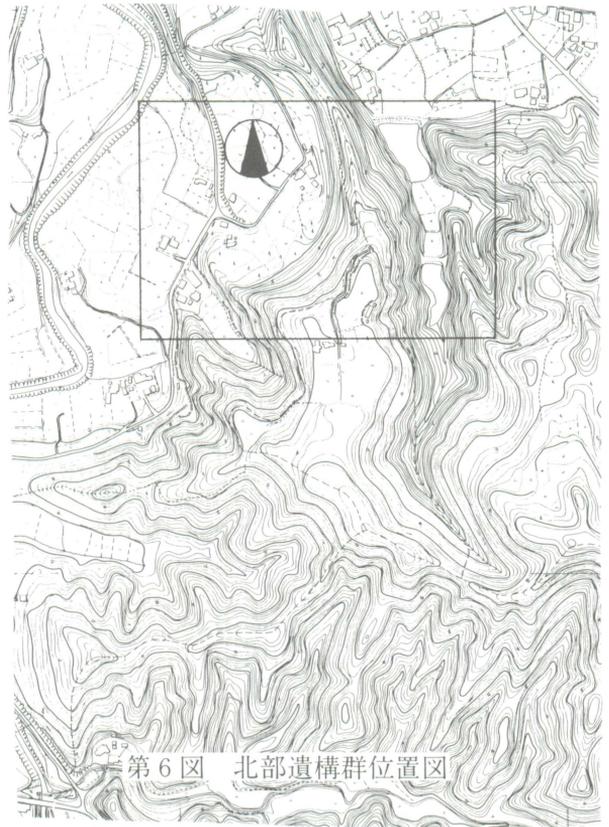
ると38にも及ぶ。山麓部の水田になっているものは形状・規模とも改変を受けていると思われるが、その他はほぼ原形を留めている。全体的にみて幅が狭く帯状の曲輪が殆どであるが、なかには槽台状のものも見られる。また、土塁を周囲に巡らすものも確認された。付属施設として井戸が2基検出された。

この腰曲輪群の所在する一帯は小字「木出」と呼ばれ、城郭に伴う地名として認識されるものである(註1)。山麓部の道路を隔てた所は小字「松葉」と呼ばれ、ある程度の平坦部を有している。西側が比高差約10mの崖になっており、そこには「やぐら」が存在する。崖下には「山中みち」と呼ばれる長狭街道の横根峠に通じる道が通っている。周囲の地形を考慮すると、この「松葉」地区を推測的に城主の居館の所在地と見ることもできるのではないだろうか。

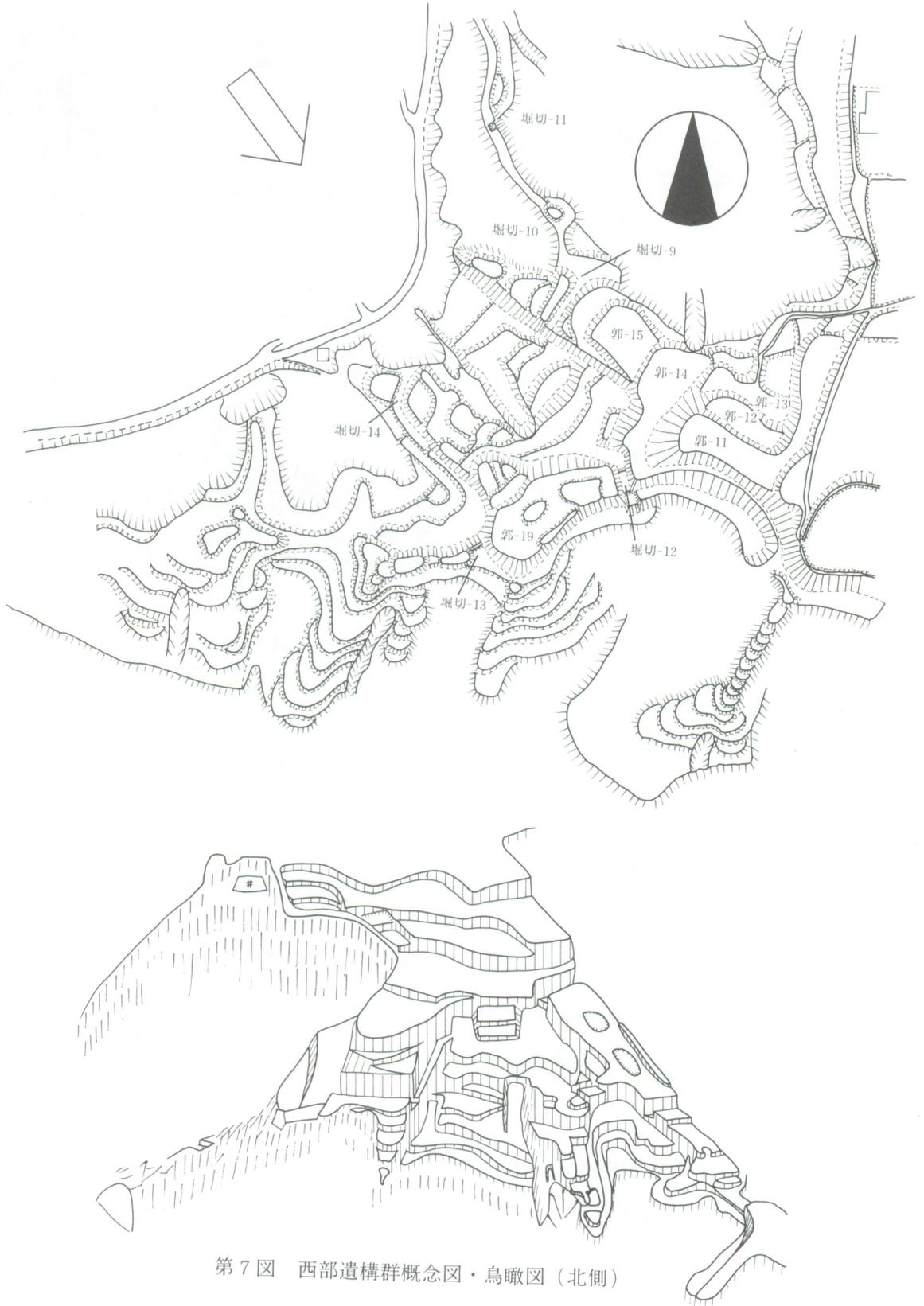
北部西側の斜面は城域全体からみて最も斜面が緩やかな場所であるため、また直下に交通路があるために敵に一番狙われ易い部分である。このため大手門前の第1の防衛線としてこれだけの腰曲輪を設けて敵に対処したものと思われる。

註

註1 柴田龍司 「佐是城跡・岡本城跡発掘調査報告」『千葉県中近世城跡研究調査報告書第6集』 千葉県教育委員会 1985



第6図 北部遺構群位置図



第7図 西部遺構群概念図・鳥瞰図（北側）

4. 西部遺構群

郭-2から西へ延びる尾根に展開される遺構群であり、いわゆる「尾崎曲輪」が所在する地区である。ここは郭-14から北西に延びる尾根と西に延びる尾根に分かれる。

北西に延びる尾根は、郭-15の先の堀切-9（上幅7m、下幅3m、深さ約10m・8m）によって切断され、さらに数段の腰曲輪が造成され、小規模ながら堀切-10が入れられている。この尾根の南側は比高差12~26mの断崖絶壁になっており、下からの登攀を防いでいる。しかし、この絶壁にも堀切-9の堀底から郭-14の直下に通じる犬走りや堀切-10からジグザグに降りる犬走りが存在している。

堀切-9から北へ細長く延びる尾根は、両側をそぎ落として通路を狭くした尾根道になっており、途中に櫓台や堀切-11を設けている。堀切-11は上幅約4m、深さ約1mであるが、貫通せず、西側に土橋を残している。

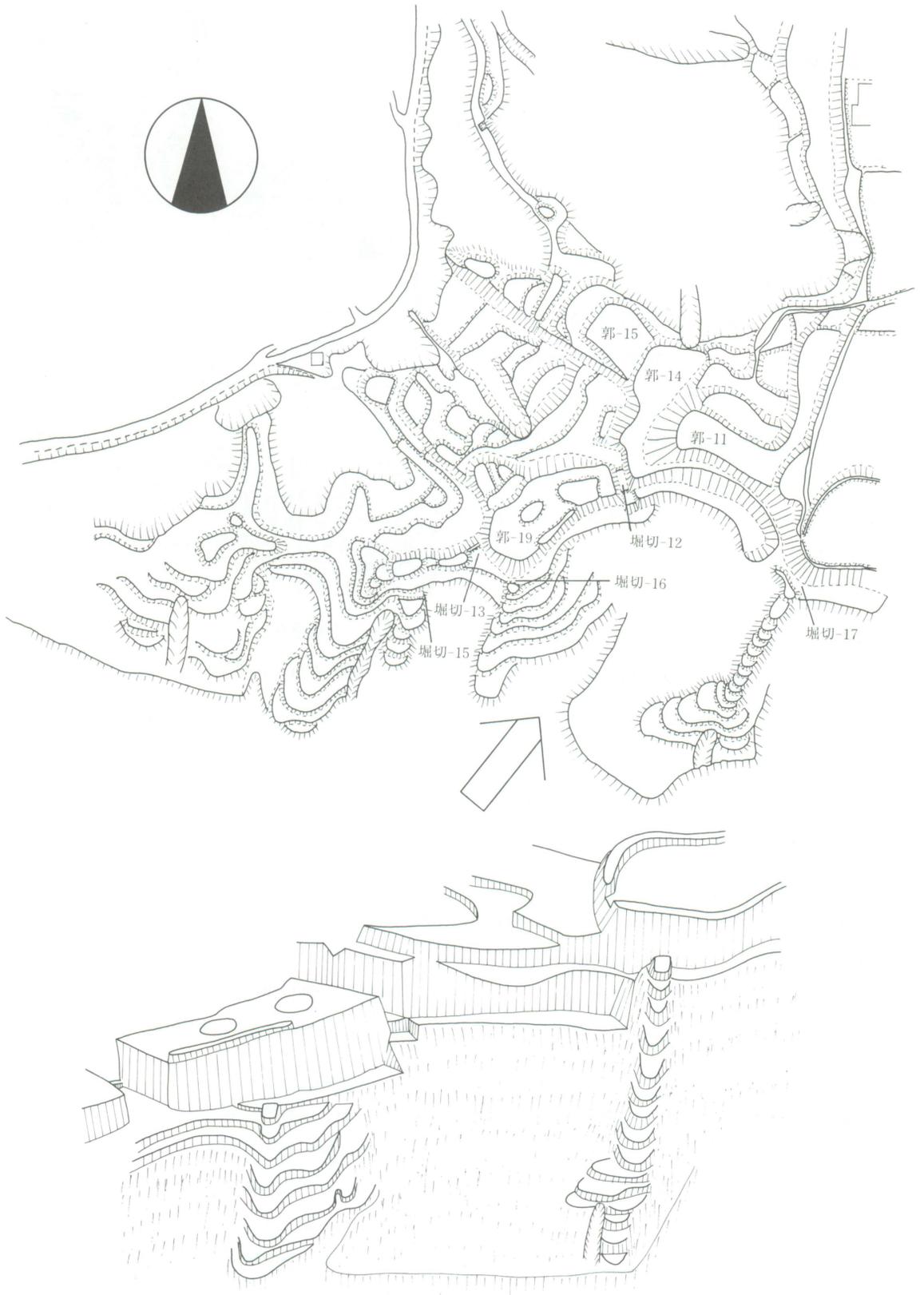
さて西に延びる尾根であるが、ここは山頂から山麓部まで複雑な遺構が展開している。まず、郭-14と郭-19を分断する堀切-12（上幅約8m、下幅約3m、深さ約6m）は北側が約5mの段差をもって西に屈曲する。郭-19は、20×55m程の不整長方形の郭（面積約1,100m²）であり、郭内には櫓台状の高まりが2か所所在する。また南側には土塁の一部が残存している。郭-19の西側は堀切-13（上幅約11m、下幅約6m、深さ約12m・5m）によって切断され、独立した郭を形成している。堀切-13の堀底には北側の端に幅1m、高さ1m程の土橋が削り残しによって形成されている。堀切-13の西にはさらに小規模な曲輪が連続する。

西に延びる尾根の北側斜面の遺構を見てみると、郭-19から北西に延びる枝尾根上には小面積の腰曲輪が階段状に形成され、郭-15の所在する尾根との間の斜面には幅の狭い腰曲輪が7段形成され、また上幅12mの堅堀も確認された。堀切-14からは堀切-13の下へ向かって帯曲輪状の細長い曲輪が巡っていて、さらにその下に2段の帯曲輪が谷を囲むように所在する。

これらの遺構群は郭-19や郭-14・15（尾崎曲輪）へ侵入して来る敵に対する防御施設としてかなり入念に造成が行われている。その土木工事量は大変なものだったことと推測できる。この地区の山麓部は「横馬場」という小字になっており、城郭関連の地名として認識されるものである。



第8図 西部遺構群位置図



第9図 西部遺構群概念図・鳥瞰図（南側）

つぎに南側斜面の遺構を見て行く。

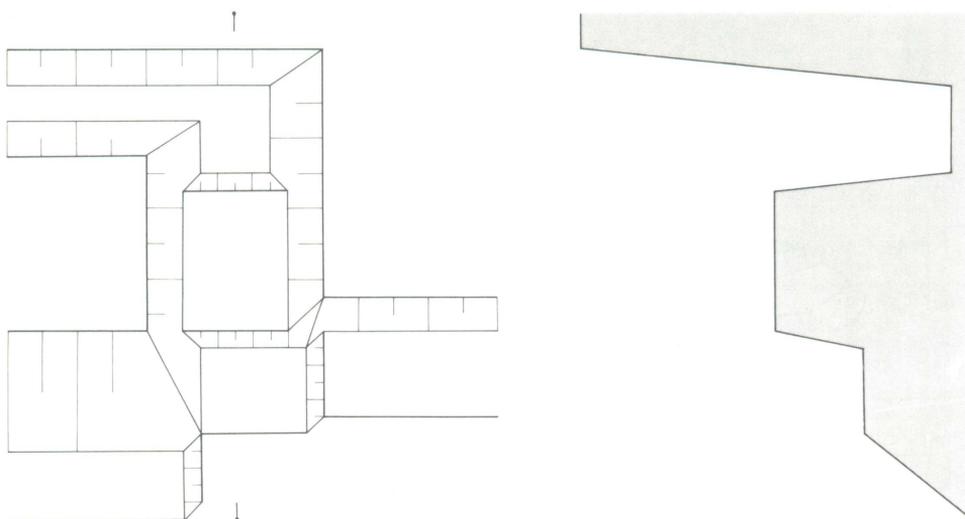
ここは南に突出した枝尾根に形成された段々畑状の帯曲輪を中心とした遺構が展開される地区である。また、ここでは郭-1（本城）の南側の堀切-18（大堀切）堀底へ通ずるルートも確認することができる。

堀切-15から帯曲輪を通して堀切-13南の堀切-15に入る（距離約50m）。郭-19南の帯曲輪を約60m進むと堀切-12の南側に到達する。ここは帯曲輪が食い違い及び段差によって、また堀切-12の南側の約2mの段差によって複雑な施設が構築されている。それによって帯曲輪間どうしや堀切-12の堀底へは直接行けないようになっている。さらに帯曲輪を約55m進み、比高差約20mの崖を上ると堀切-17に至る。ここは郭-1の西端の直下にあたる。なお、ここからは絶壁の途中に犬走りが形成され、郭-14へ行くことができる。堀切-17からは郭-1南の帯曲輪を約100m進むと堀切-18の堀底に到達する。

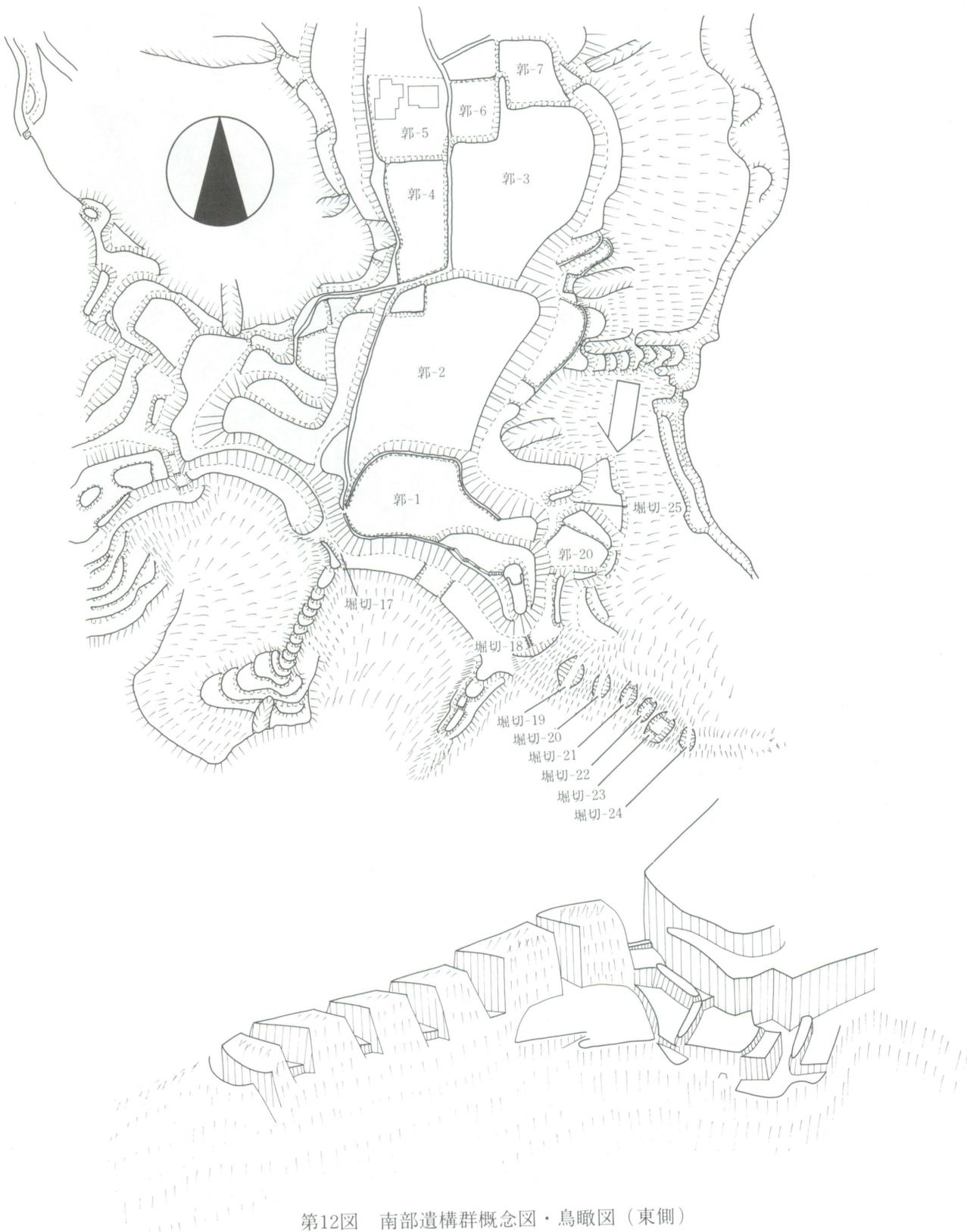
郭-19から南に延びる枝尾根の東側、沢に面した斜面には腰曲輪が所在するが、その下から3段目の壁に幅約5m、奥行き約1.5mの横穴が掘られている（図版5の2）。成形した工具の痕跡も明瞭に残っており、明らかに人為的な遺構と判断できるが、内部施設、遺物等検出することができず、その性格は不明である。



第10図 西部遺構群位置図



第11図 堀切-12周辺遺構模式図



第12図 南部遺構群概念図・鳥瞰図（東側）

5. 南部・東部遺構群

城域の南端、郭-1（本城）の周囲に展開する遺構群であり、城の搦手にもあたり、規模の大きな遺構がいくつか見られる。

通称「七堀切」（堀切-18~24）は摩利支天社から南東に延びる尾根を断ち切り、城域の南端を画する。堀切-18は上幅約18m、下幅約6m、深さ約13m・7mで堀底中央に土橋状の高まりが削り残されている（図版6）。堀切-19は上幅約11m、下幅約4m、深さ約10m・5m。堀切-20は上幅約6m、下幅約2.5m、深さ5m前後。堀切-21・22は近接して掘られ、共に上幅約7m、下幅約3m、深さ5m前後で堀底の東端に段差が掘削されている。堀切-23は上幅約10m、

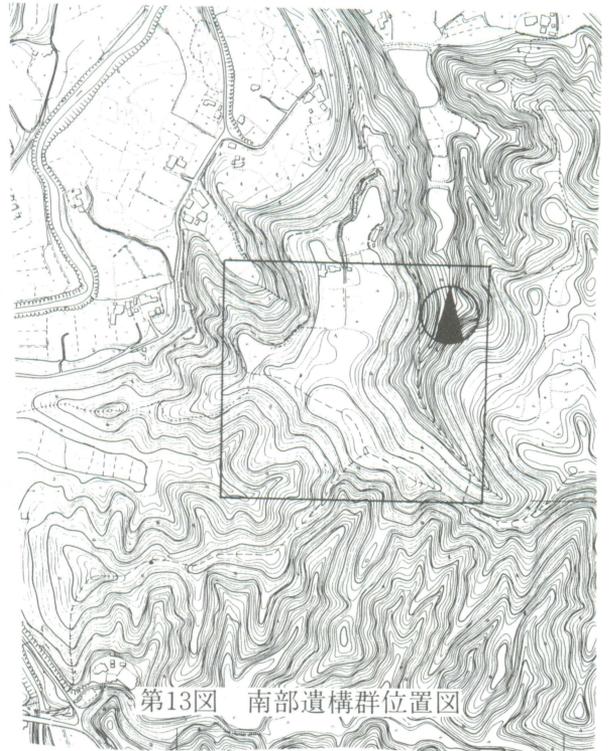
下幅約6m、深さ約5mで壁面がほぼ垂直に落ちる箱堀状を呈す。堀底の両端に段差が掘削されている。堀切-24は城域の南端を画する遺構であり、上幅約6m、下幅約3m、深さ約4mで城外に湾曲する形態をとる。

郭-1の南側の比高差約12mの崖下には幅約8mの帯曲輪が所在し、途中には比高差約4m長さ約14mの窪地が造成されており、自由な通行を妨げている。

堀切-18から南西に延びる枝尾根には階段状の小規模な平坦部を造成し、尾根の両側から互い違いに削り込みを入れて、通路を鉤の手状に狭くした遺構も見られる。

堀切-18の堀底の東側を通路状の遺構（幅約3m）を通過して北進し、比高差約6mの段差を下りると郭-20（面積約500㎡）に入る。郭-20の北には峰上城跡最大規模の虎口遺構が所在する。堀切-25をY字形に掘削し、東斜面から上がってくる通路と郭-7の東側から連なる帯曲輪を通過して来る通路が合流し郭-20に至る。郭-20へ上がる壁（比高差約1.5m）には切石積み階段（図版9）が構築され、郭-20の縁辺部には切石を積んで補強した施設が確認された。

郭-1~7の東側には一段下がった位置に腰曲輪が連続し、所々に堅堀を入れている。郭-7の下には「馬洗井戸」・「東井戸」と呼ばれる2基の井戸が所在する。郭-2の東に延びる枝尾根には階段状の腰曲輪が続き、北側に堅堀が2段に掘削され北から入り込む谷と接する。ここは沢道になっており、枝尾根を南に通過した所に岩盤を両側から張り出させた大規模な虎口が所在する。関尻の谷から郭-1（本城）へ直結する重要なルートとしてそれなりの施設が随所に見られる地区である。



第13図 南部遺構群位置図

第4章 周辺の中世的景観

1. 峰上地域の中世的景観

峰上城周辺に残る中世的景観である遺跡、寺社、小字名等の地名を調査し、峰上地域の中世の様子を出来る限り復元しようと試みる。(第2・14図)

(1) 中世遺跡

中世に比定される遺跡は、現在確認されたもので城・「やぐら」・集落がある。城は峰上城跡の他、常城砦跡、東大和田城山砦跡の計3か所、「やぐら」は4か所、集落は1か所確認されている。なお城跡については後述することとする。

小志駒やぐら(註1)(図版10) 小志駒字松葉に所在し、峰上城跡北部遺構群(西側)の腰曲輪群の山麓部からさらに一段下りた道路に面した崖面に位置する。2基が確認され、1号やぐらは玄室幅約2m、奥行約1.5m、高さ約1.5m、羨道部は崖が削られたため僅かにしか残存しておらず、幅約1m、床側の壁は崩落してしまっている。2号やぐらは奥壁を残して殆ど削られており、玄室幅約2.5m、高さ約1.5m(遺存)。奥壁向かって中央やや左に幅約1m、奥行約0.5mの方形の龕が掘り込まれている。

天神台やぐら 関尻字天神台の台地東側崖面に1基所在する。玄室幅約5m、高さ約3m、奥行は崖面が削られているため約2mが遺存するのみである。奥壁には幅約2.5m、高さ約2m、奥行約1mと幅約1m、高さ約1.5m、奥行約0.5mの龕が連続して掘り込まれている。なお、隣に防空壕らしき穴が掘られ、やぐらと貫通してしまっている。

恩田やぐら(第15図、図版11) 恩田字西屋敷、渡辺家の裏山に所在する。玄室幅約4m、奥行約2m、高さ約1.5m。奥壁には燈明穴2基、30cm×60cm×12cmの龕状の掘り込みを2基持つ。玄室内部には五輪塔及び宝篋印塔が存在し、2基を除いて各部位が散在しているが、合計7基(内宝篋印塔2基)あるものと思われる。復元状態を仮定して向かって右から1号～7号と呼称することとし、遺存状態の良好な2号塔は高さ約1.25m、3号塔は高さ約1.15m。いずれも各部位に梵字が刻まれている(地輪部は風化が著しいため消滅)。なお、3号塔の下に納骨穴が確認された。

常代やぐら(第15図、図版12) 関尻字西ノ崎、常城砦の南側斜面、旧薬師堂跡の裏山に所在する。玄室幅約2.3m、奥行約1.5m、高さ約1.2m。内部施設は苔、シダ等が密生しているため確認できなかった。玄室内部には五輪塔が存在し、2基を除いて各部位が散在しているが、合計5基あったものと思われる。遺存状態の良好な2基を向かって右を1号、左を2号と呼称することとして、1号塔は高さ55cm、幅16cmで一石で造形されている。2号塔は高さ48cm、幅

18cm、こちらは空・風輪を一石、他を3石というように、一般的な造り方をしている。

宮花輪遺跡 寺尾字原畑に所在し、平成元年に君津郡市文化財センターによって調査が行われている。中世の掘立柱建物跡が5棟検出され、陶磁器等が出土している(註2)。報告書に掲載されている土師質土器の羽釜は15世紀頃に比定でき、このころの集落が想定できよう。

(2) 寺社

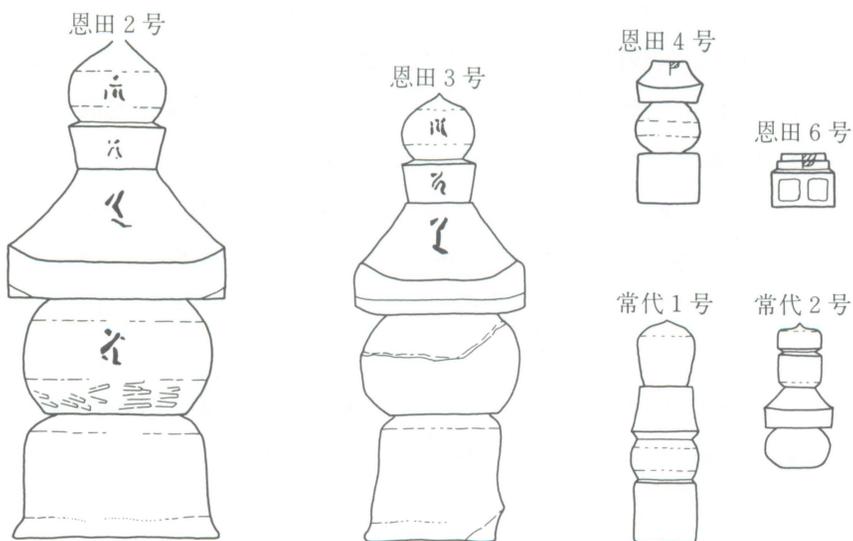
普賢寺跡 峰上城跡の南西、小志駒の諏訪神社の別当寺であった。智明山略縁起(註3)によると開基は嘉応2年(1170)、これには天文9年(1540)に里見義弘によって諏訪神社の社殿が復興された記事や北条氏直との合戦の記事が見られるが、史料的に疑問がある。また、峯上という地名が初出する永享2年(1430)銘の薬師三尊の掛仏が所蔵されていたが、盗難に会い行方不明となっている(註4)。

普門院 関に所在し、正和年間(1312~1316)の開基とされる(註5)。

興源寺 東大和田城山砦の南側に近接して位置する。応永年間(1394~1427)の開基とされる、真言宗智山派の寺である。ここには正長3年[永享2年(1430)]銘の石塔婆があり、高さ106cm、幅27cmの砂岩製で現在は上下に割れて、風化が著しい(註6)。

千手院 寺尾に所在し、天正2年(1574)の開基とされる(註7)。

環神社(原色図版2) 峰上城内、郭-1(本城地区)の最高所にある摩利支天社である。社殿は潰れてしまい、現在は小さな祠が祭つてある。かつて社殿内から摩利支天像、鏡面に奉納天満天神摩利支天銘をもつ扇双鳥文鏡(径11.0cm)、峯上之城摩利四天 天文2年(1533)9月3日の銘をもつ鰐口(径16.3cm)、弘治2年(1556)のものを含む棟札5枚が検出され(註8)、また刀剣・甲冑も共に奉納されていた。



第15図 恩田・常代やぐら，五輪塔・宝篋印塔実測図(1:20)

諏訪神社 峰上城の南西部、小志駒に所在する。天文8年(1539)の銘をもつ鰐口(径30.5cm)を所蔵し、銘文は「奉寄進上総国天羽郡嶺上諏訪神前鰐口也信心大旦那諸求円満故也 沙弥全芳敬白 時于 天文8年9月3日」である(註9)。

白山神社 峰上城の西方、峰山を越えた長崎に所在し、峰下地域になってしまうが、諏訪神社と同じ全芳の銘をもつ鰐口を所蔵するので紹介しておく。天文5年(1536)創祀であり、鰐口(26cm×29cm)の銘文は「和光同塵結縁始 奉納白山権現神前鰐口之事 上総国天羽郡嶺下郷 八相成道利物終 天文11年壬寅 6月26日 大旦那沙弥全芳之寄進 奉鑄 大工 大野筑前守」である(註10)。

六所神社 寺尾に所在し、天文8年武田氏再建と伝える。

(3) 集落

上記の中世遺跡、寺社に地名、交通路等を考慮して峰上城周辺の中世集落の様子を考えてみたい。

まず所在する3つの城の位置関係は、峰上城から常城砦、東大和田城山砦までは共に約1km、常城砦と城山砦の間は700m程である。いずれも見通しが良く、連絡・合図を送るのも容易である。

城に関連する小字名は、峰上城周辺では「要害」・「横馬場」・「木出」、常城砦周辺では「常城」・「城ノ台」・「古屋敷」・「矢倉前」・「馬場崎」・「外馬場」、城山砦周辺では「堀切」・「坂口」等が残っている。城山砦の西側の山麓に所在する林家の屋号は「城山(じょうやま)」と言い、城山砦を城と認識してきたことが伺える。

現在、上総湊から東進する鴨川街道沿いに存在する環の町場は、鴨川街道の整備された江戸時代以降に形成されたと思われるが、峰上城の山麓に位置する、上後・小志駒の集落、常城砦の山麓に位置する関尻・中里・恩田の集落、城山砦の山麓に位置する東大和田の集落はいわゆる根小屋集落的な色彩を帯びていると考える。また、これらの集落にはそれを裏付けるように上記の中世以来の寺社や「やぐら」の存在が確認される。

峰上城跡の西側に位置する関の集落には「関」としての防御的施設を彷彿させる石造物が存在する。この周辺は東西両側から丘陵が湊川の河岸にせまり、狭い段丘が曲折したかっこうの防御的地形であり、小字「姥石」には望楼・関門・障堀・層塔などの構築物の礎石と思われる八角形の巨石が存在する(註11)。

当時の峰上の集落には、安房国との国境に近い西上総南部の交通の要衝であったこの地に峰上城を築き、交通路を掌握し、安房の里見氏を牽制すると共に、湊川流域の穀倉地帯をおさえるといった領主の戦略的な意図が伺えるが、常城砦、東大和田城山砦の使用年代が不明であるので、その点は推測の域を出ない。

註

- 註1 『千葉県埋蔵文化財分布地図』(3)一市原市・君津・長生地区一 千葉県教育委員会 1987
では名称を小志駒横穴群としてやぐらの可能性もあることを示唆しているが、形態から判断して「やぐら」として使用された可能性が高いので、ここでは小志駒やぐらと呼称することにした。また、所在地の小字が誤っていたので訂正した。
- 註2 桐村修司 『宮花輪遺跡』 君津郡市文化財センター 1990
- 註3 『富津市史』資料集1 富津市史編纂委員会 1979
- 註4 小宮保四郎 『峯上城址踏査による中世紀史料の一斑』天羽町文化財審議委員会 1970
- 註5 『富津市史』通史 富津市史編纂委員会 1982
- 註6 註5に同じ
- 註7 註5に同じ
- 註8 註4に同じ
- 註9 『富津市史』資料集2 富津市史編纂委員会 1980
- 註10 註9に同じ
- 註11 註5に同じ

2. 周辺の城館跡

現在、湊川流域には峰上城跡を含めて城館跡7基、烽火台跡1基が確認されている。これらと共に富津市内に所在する主な城館跡について紹介してみたい。(第1・14図)

東大和田城山砦跡(図版13) 東大和田字堀切に所在する。湊川の支流である愛宕川の北岸、標高約87mの丘陵に占地し、峰上城跡から北に約1kmの地点にあたる。

城の東側を南(小字「坂口」方面)から堀切状の道が山頂まで続き、頂上には土塁で囲まれた郭が存在する。北側と南側に延びる尾根筋には堀切が共に入れられ、南側・東側の斜面には腰曲輪が数段ある。西側は断崖になっていて山麓には「城山(じょうやま)」という屋号をもつ林家があり、西方約700mの地点にある常城砦及び湊川下流域方向が良く見渡せる。

常城砦跡(註1)(図版13) 関尻字苗代台に所在し、湊川が東から北、西へと蛇行し、南から支流志駒川が合流してくるといふ三方を川で囲まれた中の独立台地に立地する。唯一開口している南側の約1km先には峰上城跡が所在する。標高65m前後で比高35m程であり、峻険さに欠けるが、西側の川に面した突出部は「勝負落し」と呼ばれる断崖絶壁になっている。台地上には段差を持った郭が確認され、東側斜面には腰曲輪が数段確認される。台地の北側には東から西へ延びる大きな空堀が存在し、西側斜面と北側斜面の2か所に井戸がある。特に西側の井戸は「ワラジガエ井戸」と呼ばれている

天羽城跡 (図版14) 相川字天羽越に所在する。標高132m、比高90mの丘陵上に立地する典型的な山城であり、峰上城跡から西に3.5kmの位置にあり、君ヶ谷城跡との中間点にあたる。天羽氏の居城と推定されているが、時期及び城主ははっきりしていない。遺構は曲輪、堀切、土橋状の施設、石垣、犬走り状の通路、絶壁が見られる。なお、石垣の石材は平坦面を造成するために岩盤を掘削した際に生じる凝灰岩系の切石を使用しており、立方体、直方体の双方の形態が認められた。さらに天羽城跡の北方の尾根続きには頂上部に明確な曲輪が見られないながらも、小規模な堀切や若干の腰曲輪が見られ、古式の様相を呈しながら、斜面部には、豎堀を入れ、その途中を鍵の手状に屈曲させ、両側から岩盤成形の張り出しを持った虎口や腰曲輪の壁に切石を積んだ石垣状のものが確認された。天羽城とは別の城の存在が想定される。

天神山城跡 (図版14) 海良字天神台に所在し、丘陵から分かれた舌状台地が北に延び、湊川の下流域に達する先端部に位置する。現在は畑の耕作、宅地の整地等で城郭としての遺構は明らかではないが、『富津市史』によると空堀の一部と思われるものを発掘調査時に検出しているという。北は湊川、南は急峻な山々という自然の要害に立地し、ここからは湊川河口及び東京湾が一望できる。この台地の東端の崖下に「根小屋」と称する屋号があり、さらに根古屋という地名もある。また、城域内には天神社と報恩寺があり、東南430mの所には妙見社がある。

服部館跡 (註2) 相川字柳糸に所在する。湊川の支流、高野川の可岸段丘上に立地し、背後には急峻な山が迫っている。石塁の一部が残存し、堀之内という小字名が残っている。山間部に位置し、この地域を支配していた土豪の館であったと考えられる。なお、近くに正木氏の墓塔が所在している。地元ではここに城があったという伝承があり、20年程前まで「城」という姓の方の屋敷だったそうである。現在は荒地となり、「城家」の墓地のみが残っている。この墓地には2基の宝篋印塔が確認され、明らかに中世まで溯るものである。

鳥海館跡 梨沢209に所在する。湊川の支流、梨沢川右岸の台地上に立地する山間部の館である。現在鳥海家の屋敷には一部に土塁が見られ、南側背後が山で北側には一段下がって平坦部が造成されている。鳥海姓は江戸時代文化年間に改姓したもので、もとは吉原小左衛門という土豪であった。先祖は文献(註3)に登場する峰上城尾崎曲輪根小屋にいた吉原玄蕃助である。

岩坂烽火台跡 岩坂字天王台に所在し、鬼泪山山系の支脈が東京湾に面して延びている台地上に立地する。8×5m程の構築土台であり、標高35m、比高は20m程度である。ここからの烽火の合図先は東南の方向約3kmに所在する峰上城であった。

君ヶ谷城跡 大釜戸字君ヶ谷に所在する。丘陵主脈の基部から北へ延びる支脈を利用し、先端には白狐川が流れ、東は関山川によって自然の要害となっている。西は谷が奥深く入り込み、特に主郭に行くにつれて急崖をなしている。確認された遺構は、曲輪、空堀、切割、井戸等がある。文献には全く登場せず、築城者、歴史は不明である。しかし、この城の北西の方向2.2kmには海岸に位置する造海城跡があり、東の方向7kmには峰上城跡が所在する。

造海城跡 竹岡字城山に所在する。別称百首城とか百首の要害とも称す。東京湾の波打ち際にそそり立つ山城で、海上及び海岸づたいの侵入者に対する防御の城である。真里谷武田氏が安房の里見氏に対抗する目的で築いたと言われ、その後里見氏の守城となってからは対岸の小田原北条氏の侵略に備えた。また、ここを根拠として里見の水軍が活躍したところとも推定される。遺構としては、烽火跡、空堀、井戸、物見櫓跡、土塁、石積み、切割、溜池等がある。また、この城は中世の城の構築物と中世の寺院跡の遺構、そして近世において幕府の海防のために利用されたので、3つの遺構が混在している。

金谷城跡 金谷字要害に所在する。上総、安房の国境、海岸に面した丘陵上に位置し、ここからの眺望は東京湾を隔て三浦半島全体が視野に入る。発掘調査によって城の構造、埋没遺構、出土遺物による年代観等が明らかになっている(註4)。四脚門と一体となって機能する岩盤整形の虎口や石垣など特徴ある遺構が検出され、出土した国産陶器から16～17世紀の城郭であることが判明している。真里谷武田氏の築城と伝承されるが、里見氏に奪われた後、対小田原北条氏の「海城」として大規模に改造されているようだ。

引用・参考文献

- 文献1 『千葉県埋蔵文化財分布地図』(3)ー市原市・君津・長生地区 千葉県教育委員会 1987
文献2 『日本城郭大系』6千葉・神奈川 新人物往来社 1980
文献3 『富津市史』通史 富津市史編纂委員会 1982

註

- 註1 名称について文献1及び文献3は常城砦とし、文献2では常代城としている。
註2 文献3では正木館としている。
註3 「鳥海文書」『神奈川県史』資料編3 古代・中世 1979 6961・6962・6987・6988号文書 北条家朱印状
註4 野中 徹ほか 『金谷城跡一ノ郭発掘調査報告一』 金谷城跡調査団 1981
諸墨知義・甲斐博幸 『金谷城跡』 君津郡市文化財センター 1988
諸墨知義 「金谷城跡の調査」『千葉史学』第18号 1991

第5章 ま と め

1. 測量調査からみた峰上城跡

今回の測量調査で明らかになったことは、峰上城の城郭遺構が山頂部の平坦部周辺に限られていた従来の認識を遙かに越えて、斜面部、山麓部まで及んでいたことである。しかも、その遺構はほぼ完璧な状態で保存されていることも確認された。

房総丘陵、鋸山―清澄山丘陵北縁部に占地する本城はその立地自体、天然の要塞であり、さらに造成された城郭遺構は敵の侵入を絶対許さないという築城者の意図がありありと感じられる。これだけ大規模な土木工事を要する本城は、いったいどれだけの人手でどれくらいの期間で構築されたのだろうか。一気に造るにはものすごい労力があるのは必至である。徐々に城域を拡大したのだろうか。改変を含めて発掘調査でもしない限り、その答えは何とも言えない。

南北約600m、東西約500mの規模を有し、直線連郭式とも言うべき主要郭を配す。枝状に延びる尾根は25か所にも及ぶ堀切で切断され、斜面には段々畑状の腰曲輪が山麓部まで続く。城内の通路もほぼ復元することが可能であり、しかも要所要所に段差や窪地、食い違いの構造が見られ、一気に攻め入れない工夫がなされている。また、大手筋、搦手筋も確認でき、特に沢道に入る搦手筋の虎口は相当規模の大きなものであった。

「鳥海文書」に登場する吉原玄蕃助以下廿二人衆が屯集していた「尾崎曲輪根小屋」の構造の実態が明らかになったことも大きな成果と言えるだろう。曲輪の居住性を考慮した場合、文献でいう「尾崎曲輪上下小屋衆」・「尾崎曲輪下小屋衆」・「尾崎曲輪根小屋廿二人衆」は郭一11～15に「小屋」を建て在番していたものと思われる。

郭一11～15は郭一2の西側に突出した一種の腰曲輪であるが、比較的広い平坦部を有している。位置的には主郭への入口部に近接し、城郭中心部に対する防御線として重要な位置を占めている。また、周辺の構造を見るとかなり入念な防御施設、例えば郭一15の西側の堀切や南北両側の絶壁構造等、が構築され「尾崎曲輪」自体外敵の侵入を寄せ付けないようにさえ感じられる。この周辺には絶壁の中段に犬走り状の通路が存在することもひとつの特徴として挙げられるだろう。

堀切一18～24のいわゆる「七堀切」は主郭に連なる尾根筋を7本の連続する堀切で断ち切り、県内の城では他に見られない遺構である。築城者の念の入れ方の一端が伺える。

斜面部は地形の特徴を生かし、急斜面はさらに岩盤を削り落とし断崖絶壁にし、緩斜面は段々畑状の腰曲輪を造成している。

郭一20の堀切一25側の壁に見られる石積み遺構（石垣及び階段）については、現在のところ

石塁状遺構や石垣が岡本城（註1）、造海城、天羽城、金谷城（註2）、山之城（註3）で確認されており、西南上総から安房にかけての分布を示すことから里見氏の築城した城郭の特徴の一つかもしれない（註4）とされている。

参考文献

市村高男 「中世城郭史研究の一視点 一資料と遺構の統一的把握の試み一」『中世東国史の研究』 中世東国史研究会 1988

註

註1 柴田龍司 「佐是城跡・岡本城跡発掘調査報告」『千葉県中近世城跡研究調査報告書第6集』 千葉県教育委員会 1985

註2 諸墨知義、甲斐博幸 『金谷城跡』 君津郡市文化財センター 1988

註3 川名 登 『房総里見一族』 新人物往来社 1983

註4 註2に同じ。また註1においてもその可能性を示唆している。

2. 文献史料からみた峰上城

築城年代について

一説に峰上城は寛政2年（1461）頃の築城と考えられているが、根拠が不明であり、また「里見代々記」には文明3年（1471）頃真里谷道観入道が峰上領に玉木の城と名つけ楯籠ったが、里見義実によって攻略されたという記載も見られる。

「上総武田家略系」（長生郡西村山内武田官兵衛家所蔵）によると、峯上武田氏、三河守、峯上城主、佐貫城主として信武、「序南武田氏系図」には三河守、天羽郡峯上城主として信武の名前が見られる。この信武は系図によると信興の兄弟にあたる人物であるが、系図以外には登場せず、実態が不明である。信興は「真里谷武田系譜関係書」によると、清嗣、武田三河守信興、若名八郎五郎。法名號道鑑。總州真里谷祖也。と、され、「上総国菅生庄本郷飯富宮梵鐘銘文」〔享徳11年（寛正3年）（1462）〕の前三河守清嗣、「太田道灌状」〔文明11年（1479）〕の武田参河入道、「後土御門天皇綸旨」〔明応8年（1499）〕の武田三河入道道鑿を同一人物と見るならば、武田三河守逝去は永正辛未〔8年（1511）〕六月廿四日であることから、15世紀後半から16世紀初頭にかけて活躍した人物と思われる。従って兄弟である信武もほぼ同年代に生存したと考えれば、峰上城築城もこの頃に求められるであろう。

なお、峰上城内に所在する摩利支天社の天文2年（1533）銘の鰐口には「峯上之城」と記載されており、資料の作成年代の信憑性を確かめなければならないが、当時峰上城が「みねがみ

のしろ」と呼ばれていたことを示すものと思われる。

峰上城の歴史的事象

文献史料に峰上城及び峰上の地名が登場するのは、(1)天文初年代において鶴岡八幡宮造営の為の材木を切り出した件について、(2)天文6年における真里谷武田氏の内紛に関する件について、(3)天文23、24年に尾崎曲輪廿二人衆・吉原玄蕃助に差し出された北条氏の朱印状に関する件について、の3例が知られている。(1)・(2)は「快元僧都記」、(3)は「鳥海文書」等に見られるものである。

(1)「快元僧都記」によると享祿5年(天文元年)(1532)5月、北条氏綱が音頭をとる鎌倉鶴岡八幡宮の造営が始まり、造営のための古木を房総の山に求めて小弓義明を通して真里谷武田惣鑑へ協力を要請してきた。しかし、小田原北条氏が中心となる鶴岡八幡宮造営への協力を真里谷武田氏も安房の里見氏も断ったことを伝え(天文2年4月11日の条)、反小田原北条の姿勢を明確にしている。翌天文3年5月20日の条には「上総衆退治、義明御進発」とあり、真里谷武田氏が小弓義明に攻められ、両者が敵対するようになっている。また、同年11月20日には椎津城も攻められている。なお、「武田氏系図」では惣鑑は天文3年午7月朔日に没している。そして天文4年には真里谷武田氏は小田原北条氏と結び、八幡宮造営に寄進しており(6月6日の条)、以下の通り峰上の地から材木を供給している。

天文四年八月十日 鳥居本願、上總峯上へ可罷越分相定。爲材木取之云云。

天文四年十月 去八月以来。上綱(總)峯上之地古木卓山之間、當社之材木被取畢。同鳥居木二本、彼本願被伐之由被申。彼國屬當國、即造營之材木等可自由瑞相之由諸人申之。

天文五年二月廿七日。以國郡人夫總州峯上材爲可被引數千人被差越畢。以此次。鳥居木可被出山云々。

天文五年五月十日 總州峯上鳥居木、數千人之夫力可入處、去廿七日以洪水數千町引出了。即臨海耳。・・・

(2)先に示した「快元僧都記」天文3年(1534)5月20日の条に始まる事件は、同6年(1537)に及ぶ上総真里谷武田氏及び安房里見氏を中心とする内乱として記録されている。その核心たる天文6年5月14日の条は以下の通りである。

上総依錯乱、新地所楯籠真里谷一族、惣領可取除由、依申上、大弓義明御進発、打過而、十六日向峯上被寄御馬了、

この文書は一般的には「上総が錯乱して真里谷一族が内争し、真里谷に新築された城に立籠った一派は惣領(信隆カ)を排斥し、これを取り除くために小弓御所義明に出馬を請うた。天文6年(1537)5月14日、義明は進発して16日に峰上城に向い馬を寄せる」(小笠原氏)と解されてきた。

これに対し、近年「『惣領(即ち信応)可取除由』大弓御所に言上して信隆側が『所楯籠』の

『新地之城』云々」(伊禮氏)と解したのを踏まえたかと思われる「信隆を支持する真里谷一族が惣領(信応)可取除」と真里谷本城北方尾根つづき至近の『新地』の城に立て籠もって信応を圧迫したため、上総は『錯乱』した」「義明は信応を援けるため兵を率いて小弓を進発し、信隆の峯上城を攻めている」(千野原氏)という解釈も出された。

これらを受けて佐藤氏は、上総が「錯乱」した結果、「新地所楯籠真里谷一族」(信隆派の武田氏一族・家中)が真里谷城の信応を追放すべく、小弓公方足利義明に縁切りを訴えた。しかし、義明は、従来からの関係を踏まえて逆に嶺上城の真里谷信隆を攻撃したということになる。と解釈している。

いずれにしても当時峰上城が真里谷信隆の持城であり、反乱の拠点であったことは間違いのないようである。

この戦乱は真里谷武田氏の天文3年(怨鑑没)以来の家督相続をめぐる権力闘争の激化によって勃発したものであるが、信応派には足利義明、義明の意を受けた里見義堯が、信隆派には小田原北条氏が介入している。結果的には信隆派の敗北となるのだが、相互に外的勢力を導入しなければ、一族・家中内部の分裂さえ克服しえない程、真里谷武田氏自体の権力基盤が弱体化していた事が伺える。

信隆の持城であった峰上城は、永祿12年(1569)頃に記された「妙本寺文書」によると、里見義堯の取りなして峰上城をめぐる真里谷大学入道との協定が成立し、それを北条氏綱が承認し、「嶺上の地」は決着した、とあることから、その協定によって城明渡しを受けて、真里谷大学入道へ移譲されたと思われる(註1)。また、信隆自身は「物詣」ということで処分されている(「快元僧都記」天文6年6月6日、6月11日の条)。しかし、その後、北条氏康がその協定を破って横須賀左衛門大夫を差し向けて同地を請取り、伊丹を差し置いたため、結果として峰上城を小田原北条氏の房総進出の一大基地化したことを里見義堯は非難している(「妙本寺文書」)。峰上城を移譲された真里谷大学頭入道全方(心盛齋全方)とは、惣領信応の叔父で、その後見人と目された人物であるとされるが、系図類には「上総武田家略系」に大学助信秋が見られ、永正4年(1507)、上総国天羽郡佐貫郷の鶴峯八幡宮再興の棟札に信秋が見られる他は、諏訪神社鰐口銘[天文8年(1539)]、白山神社鰐口銘[天文11(1542)]に沙弥全芳と見られるのみである。諏訪神社・白山神社は峰上城の近隣に所在するため、銘文の年号を信じれば全方は少なくとも天文11年までは峰上城に在城していたと思われ、北条氏が協定を破って横須賀左衛門大夫を差し向けたのはこれ以降と考えられる。なお、武田大学助信秋は「笹子落草子」・「中尾落草子」において笹子城主武田三郎信茂の伯父として登場している。「笹子落草子」・「中尾落草子」は『群書類従』386巻戦記の部に収められ、「中尾落草子」の末尾に「かなづかい、ほんのごとく、うつしけり。てんしょう十五年十月十三日」というように書かれている。また、「峯上佐貫の兵物ども、」という記載も見られる。

(3)「鳥海文書」には以下の通り4通の吉原玄蕃助に差し出された小田原北条氏の朱印状がある。

A此度相稼、敵地(之)者至于討捕者、百疋・太刀一振可出之、但於于敵方走廻者を就于討取者、一廉可褒美、其外敵地之様躰・密事等有之者、則可申上、随望知行并御引物可被下之由、被仰出者也、仍如件、 甲寅(天文23年)二月廿七日 尾崎曲輪上下 小屋衆 吉原玄蕃助

B峯上尾崎曲輪下小屋衆廿二人之内へ、二ヶ月分兵糧廿俵十二升、此内拾俵六升、只今出之候、殘而十俵六升、來三月中旬ニ可出之候、當意致堪忍、可走廻候、猶致忠節ニ付而者、始末共ニ給恩重而可相定者也、仍如件、 (天文23年)二月廿七日 尾崎曲輪根小屋 廿二人衆□
原玄蕃助

C前々走廻候、向後之儀、猶以一廉之忠信致之ニ付而、何方成共、知行之儀、随望可遣之者也、仍如件、 天文廿四年 四月五日 吉原玄蕃助殿

D今度長狭庄致打廻、敵討捕候由、神妙候、於向後彌紛骨、可走廻之状如件、 卯月六日 吉原玄蕃助殿

これらの文書は、峰上城の尾崎曲輪根小屋上下に屯集する、吉原玄蕃助を頭目とする「22人衆」という一種の遊撃部隊の存在を示している。働きに対し恩賞を与えたり、兵糧米を送り、小田原北条氏に対する忠節を促し、彼らは安房の長狭まで出掛けていたことがわかる。当時の房総半島は里見氏の勢力圏が少なくとも下総・上総両国界に及んでいたと考えられ、天文23年(1554)ごろの情勢では、佐貫・久留里両城を結んだ線が里見氏領国の主軸であったとみられている。よって、里見氏領国内において小田原北条氏の手先になって活動した吉原玄蕃助等は、いわば獅子身中の虫的存在であった(小笠原氏)。しかし、前述したように天文6年以降のある時点で峰上城は小田原北条氏の勢力下に置かれた可能性があるため、当時峰上城が対里見氏の活動拠点であったことも考えられる。永祿2年(1559)に安房妙本寺の僧日我の書いた「いろは字」の奥書には天文癸丑(22年)7月13日夜に金谷城が兵火にかかったことが記載され(「妙本寺文書」、同様のことが「一流相伝の大事私」上巻序文(『富士宗学要集』)にも、房州に逆乱相起り、と記載されている。金谷城を襲ったのは、吉原等かもしれない。このようなことから当時の峰上城周辺の状況は里見氏と小田原北条氏がしのぎを削る不安定な地域であったと考えられ、特に東京湾と直結する湊川流域に存在した吉原玄蕃助等の土豪達は情勢を見極めながら、巧みに立ち振る舞っていたものと思われる。なお、峰上城における尾崎曲輪の位置については先述した通りである。

註

註1 千野原氏は取成の内容は、恐らく「正木兵部大輔」をもって氏綱のもとに「嶺上証人衆」を差し出すことであったとされている。「嶺上証人衆」については、湯山氏は正木氏の知行

地である三浦郡公郷寺方内の田畑を与えられており、人質として相模国にとどめられた峯上城に拠った城衆と推定している。

引用・参考文献

- 「里見代々記」『続群書類従』合戦部巻第610
- 「上総武田氏系圖」『改訂 房総叢書』第5輯 房総叢書刊行会 1959
- 川名 登 「上総武田氏について—その発給文書を中心として—」『千葉経済論叢』創刊号 1989
- 『千葉縣史料 金石文篇一』 1975
- 小笠原長和 『中世房総の政治と文化』 吉川弘文館 1985
- 佐藤博信 「房総における天文の内乱の歴史的位置—とくに上総真里谷武田氏の動向を中心として—」『おだわら—歴史と文化—』第5号 1991
- 千野原靖方 『戦国大名里見氏』 峯書房 1989
- 湯山 学 「戦国時代の六浦・三浦—房総との関係を中心に—」『中世房総』2号 1987
- 「さゝこおちのそうし」「なかおゝちのそうし」『房総叢書』第1輯 房総叢書刊行会 1912
- 『千葉縣史料 中世篇 県外文書』 1966
- 『神奈川県史』資料編3 古代・中世 1979
- 『千葉縣史料 中世篇 諸家文書』 1962
- 『神道体系』神社篇20 鶴岡 神道体系刊行会 1975

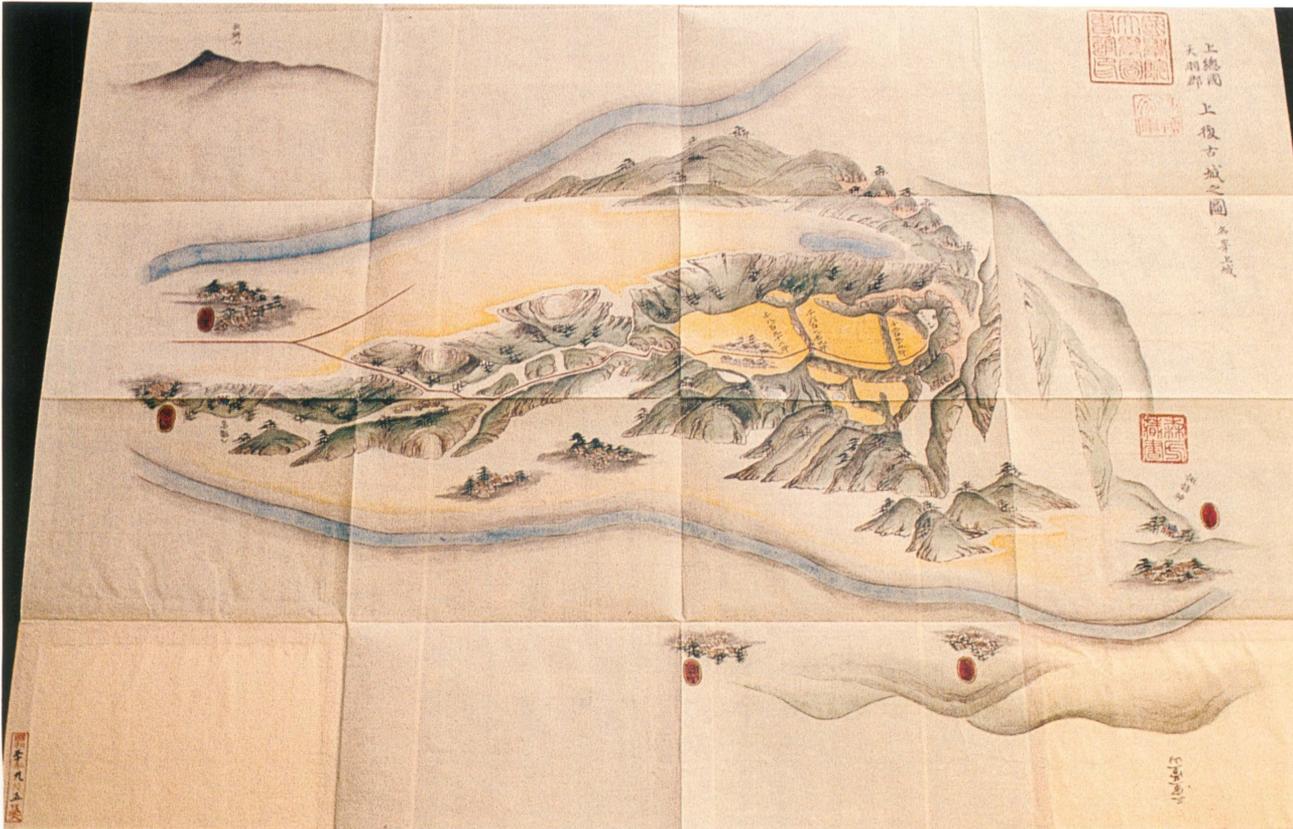
3. 結語

峰上城は真里谷武田氏が安房の里見氏に対抗するために上総南部の拠点として築城されたとされている。今回の測量調査によって城の構造が明らかとなり、文献からも少なくとも天文年間（16世紀前半）に使用されていたことが確認された。また、峰上城周辺には城館跡をはじめ「やぐら」や寺社など貴重な中世的景観が数多く残されている。これらを文化財として後世に永く伝えたいものである。今後の課題としては、城郭構造から相対的な年代観を確定すると共に、遺構の特徴から武田氏流、里見氏流、小田原北条氏流といった築城技術の相違を識別することができたら、歴史的推移がより明確になってくると思われる。これには他のより多くの城郭の正確な測量による構造的解明が待たれるところである。また、築城年代、廃城年代を示す文献を含む、より多くの文献史料の発見も待望される。

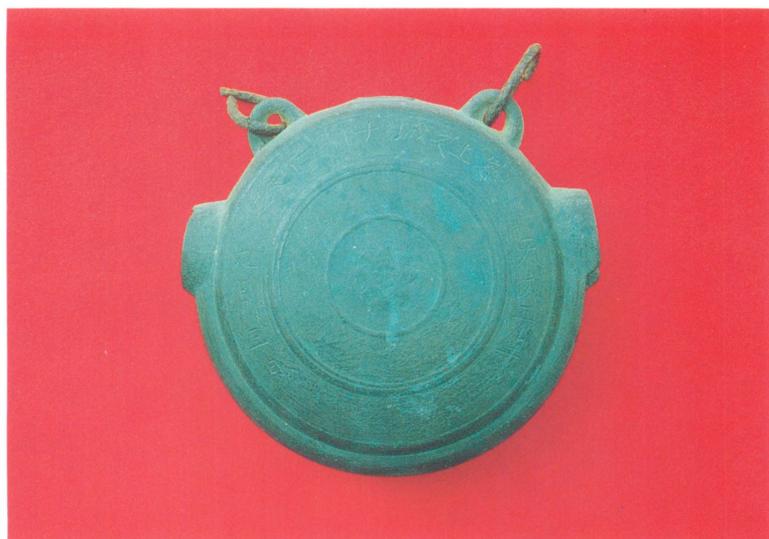
写 真 图 版



1. 峯上古城之図



2. 上後古城之図



1. 摩利支天社・罽口



2. 同上・鏡（裏）



3. 同上・鏡（表）



峰上城跡周辺空中写真(1 : 10,000) (1967年撮影)



1. 峰上城跡遠景（北から）



2. 同 上（東から）



1. 郭-14 (尾崎曲輪) (北東から)



2. 同 上



1. 堀切-1 (大堀切) (西から)



2. 北部西側腰曲輪群 (南東から)



1. 堀切-12 (南から)



2. 西部南側・横穴状遺構 (南東から)



1. 堀切-18・堀底土橋状遺構（西から）



2. 同 上（北から）



1. 堀切-25・虎口（東から）



2. 同 上（西から）



1. 堀切-25・虎口 (南から)



2. 同 上 (北から)



1. 郭-20壁面・石積階段遺構



2. 同 上



1. 小志駒やぐら (1号)



2. 小志駒やぐら (2号)



1. 恩田やぐら全景



2. 恩田やぐら内五輪塔(1~5号)

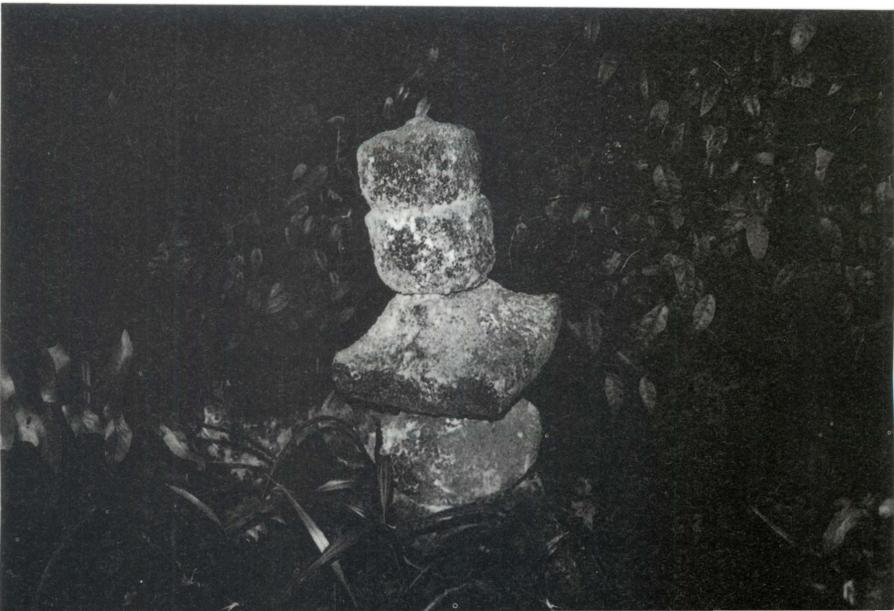
1. 常代やぐら全景



2. 同上・やぐら内
五輪塔(1号)



3. 同上・やぐら内
五輪塔(2号)





1. 東大和田城山砦跡遠景（西から）



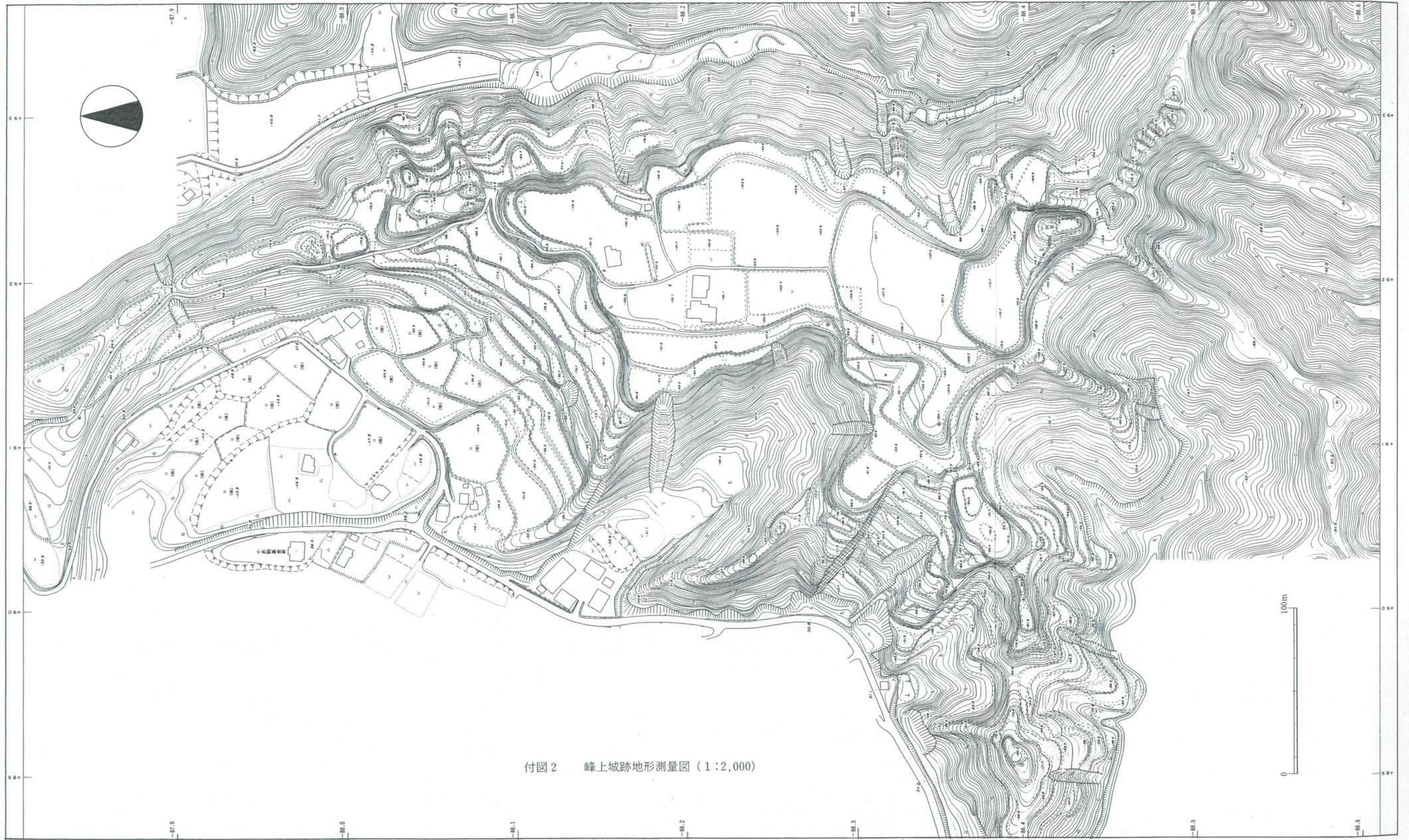
2. 常城砦跡遠景（東から）



1. 天羽城跡遠景（北西から）



2. 天神山城跡遠景（北西から）



付图2 峰上城迹地形测量图 (1:2,000)

千葉県文化財センター調査報告第218集
千葉県中近世城跡研究調査報告書 第12集
— 峰上城跡測量調査報告 —

平成4年3月31日発行

発 行 財団法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡無番地
印 刷 株式会社 弘 文 社
市川市市川南2-7-2

本報告書は、千葉県教育委員会の承認を得て
増刷したものです。